金子純久 Yoshihisa Kaneko

派遣国：ガーナ
職　種：農業機械
隊　次：昭和56年度2次隊（活動期間1981年10月～1984年1月）
出身地：新潟県
初　出：「機械化農業」1988.10.1（（株）新農林社）

学び協力して技術を移植

青年海外協力隊の名を初めて耳にしたのは、確か高校生の頃だったと思う。しかし、その当時の私は海外には興味がなく、ましてや協力隊など、全く関心を示さなかった。物好きな人達もいるもんだ、ぐらいにしか思わず、いつしか頭の中からすっかり消えてしまっていた。

再び協力隊の名前を聞いたのは、茨城県にある農林水産省農業技術研修館で、研修助手として働いていた時だった。ここではタラクターを中心に2年間、農業機械の運転 保守整備、及び圃場管理を学んだが、2年間の研修が終わりに近づいて進路を決めなければならなくなった時、なぜか急に海外に出たくなったのである。はっきりとした理由はわからないのだが、昔から欧米式の農業に憧れていて、地平線の彼方まで続く広い圃場で大型機械をフルに使ってみたいと思っていたこと、2年間農業機械を学び、他人には負けない技術を身に付けたという自惚れが、そういう気持ちにさせたのかも知れない。

そして上司に相談したところ、紹介していただいたのが青年海外協力隊だったのである。

暑さと人の波と

出発前、ガーナの事情についてはしょっちゅう聞かされたが、いつも電気、水道、ガスがない、日用品もほとんどない、食料さえ手に入れるのが難しいといった話ばかり。私としては、開発途上国に行くのだから、電気やガス、水道はなくて当たり前、日本と同じような生活ができるわけがない、と覚悟していたのに、始終あれもないこれもないという話ばかり聞かされたせいで、募るのは不安ばかり。俺はガーナで生きていけるのだろうかと本気で悩み、出発する直前には、意気込みよりも不安な気持ちのほうが大きくなってしまった。

いよいよガーナ到着。飛行機の外に出た途端、ものすごい熱気とともに一種独特の匂いが襲ってきた。暑い！またたく間に全身汗びっしょりだ。「暑い」の一言がガーナの第一印象だった。あのムッとする熱気と、不快感はないが何とも表現しがたいあの匂いは、いつまでも忘れられない懐かしい思い出である。

到着後、首都アクラの町へ出た。町には食料品、日用品、衣料・・何でも揃っていた。電気もガスも、水道もあるではないか。出発前から引きずってきた不安は、いっぺんに吹きとんでしまった。

マーケットはものすごい人波で活気に満ち溢れ、怖くて近づけなかった。店といっても立派な建物はない。今にも壊れそうな机が道路脇に所狭しと並べられ、その上にいろいろな物が山のように積まれている。あるいは、大きなたらいやお盆に品物を積み上げ、頭の上に乗せて売り歩いている者もいる。この国は本当に発展途上国なのか？と疑いたくなるほどだった。

初めての精米作業

私の任地タマレは、首都アクラから北へ500kmのところにあり、交通手段は陸路と空路がある。空路の場合、所要時間は約50分。速いし楽でいいのだが、予約をしていても乗れる保障のないのが難だった。故障したり行き先が急に変更されたりで、何日も空港に通うのは当たり前。2、3日通って乗れれば幸運だった。陸路の場合は直通の国営バスがあり、これを使うと1日で行けるのだが、チケットを手に入れるのが難しく、乗れないことのほうが多かった。民間の車も走っているが、こちらは料金が高く、ほとんどの場合、1回乗り換えなければならない。それに着くまでに2日を要した。

また、陸路の場合に道路が悪く、その上ほとんどの車は整備不良だから事故が多い。道路脇にはあちこちで車の残骸が放置されていて、そんなものを見たら怖くて、陸路で移動する気はなくなってしまう。そこでアクラ－タマレ間を移動する際は、危険で体力も消耗する陸路は避け、こちらもあまり安全とはいえないが、もっぱら空路を利用した。

タマレは北部州の州都。ここを中心としたガーナ北部一帯が米の産地である。典型的な農村地帯だ。街の雰囲気はケバケバしくなく、人々は皆親切で、私の性に合った街だった。電気、水道はあまり来なかったが、明かりは灯油ランプで十分だったし、水も節約すれば何とかなった。不自由ではあるが、慣れれば結構気ままで気楽な生活だった。

ガーナでは、米の産地は北部地方に集中している。

乾期の乾燥が強烈なため、作付けは雨期にしかできず、したがって年1回。気温が高いので、水さえあれば稲の生育は可能なのだが、灌漑設備を作る資金がないため、ほとんどが計画倒れだ。圃場は、日本の田圃のように畦で仕切ってあるわけではなく、湖や川の近くの雨期水が溜まるだだっ広い草地を耕うんし、そこを圃場にしている。

作業は機械化され、大型トラクターやコンバインを使用しているが、操作はお世辞にもうまいとは言えず、圃場はでこぼこ。耕うんするたびに圃場が荒らされるといった有様だ。それに、除草剤などは手に入らず、稲はぼうぼうの草の中に見え隠れするといった状態だ。肥料は化学肥料を使っているが、これも手に入れるのは難しく、堆肥も作る習慣がないらしく全く使っていない。そのため、地力は年々低下している。また、機械のスペアパーツの不足、燃料やエンジンオイルの不足、加えて天候不順やブッシュファイヤーによる被害など、問題は多い。

農業は自然を相手にするだけに天候に左右されやすい。しかし、それを克服することはできる。その他の問題も解決できないことではないだろう。現在のガーナにとっては難しいことかも知れないが、一つ一つ、粘り強く解決してほしいものである。

さて、私の所属したナシア・ライスでの業務は、精米機の保守・整備であった。精米機は日本製で、時間当たり3～4ｔの処理能力を持ち、日本では中型機である。日本で言う精米とは、玄米を白米にすることだが、ここでは籾から直接白米に精米していた。籾摺工程と精米工程が一貫して行われているのだ。私としては、話には聞いていたもののこのような精米工程を見るのは初めてだったし、その上精米機を操作するのも初めてであった。

派遣前に2週間ほど研修を行ったが、実際に機械を前にすると圧倒されてしまい、研修で教わったことを思い出しながら操作してみるが、失敗ばかり。同僚達は3年ほどの経験があり、機械の操作には慣れていて腕がいい。これでは、何のために私がここに来たのかわからない。一時、担当をトラクターやコンバインの整備のほうへ変えてもらおうかと悩んだが、同僚達が機械を操作しているのを見ていると、無性に腹が立ってきた。自分に対するものではなく、恥ずかしいことだが、同僚に対する嫉妬心のほうが強かった。

それから一日中機械の前に立ち、ない知恵を絞って必死で機械操作のコツを覚えようとした。その甲斐あってか、3ヵ月ほどで何とか操作できるようになり、精米成績も私が来る前より上がってきた。それと同時に、精米の難しさ、面白さも知ることができた。

パーツ不足の中で

米には大きく分けて、短粒種、中粒種、長粒種の3タイプがある。これは米粒の長さによって分別したもので、短粒種は米粒が丸くて短い。私達が毎日食べている米がそれで、日本を中心に東南アジアなどで栽培されているが、栽培地域は少ない。長粒種は米粒が細長く、世界的に広く栽培されている。中粒種はその中間で、東南アジアなどで栽培。ガーナでは、長粒種と中粒種が栽培されていた。

精米をする場合、精米期の中で米に圧力をかけるわけだが、精米には短粒種のほうが適している。短粒種の場合、形状が丸いので割れにくいからだ。中粒種、長粒種の場合は細長いため割れやすく、それだけ精米は難しい。その上、ガーナでは収穫期が乾期に当たり、急激な乾燥にさらされた米は、半数以上が籾の中で割れてしまう。中には粉々に砕けてしまうものも少なくなかった。運よく割れなかった米でも、ヒビが入っていることが多く、このような米は、精米するとほとんど割れてしまった。

また、ナシア・ライスでは数品種の米を栽培していたが、米は品種によって多少形状が異なったり、固さや厚さなども違ってくる。精米する場合、品種によって機械の調整を変えなければならないが、ナシア・ライスでは貯蔵のサイロが1本しか使えないことから、多品種の米をごちゃ混ぜにして精米していた。

こんな混合米を精米すれば、割れ米が増えるのは当然だ。おまけに私の精米技術も未熟である。割れ米の要因は他にもあったが、このような状況の中で、割れない完全米を精米するのは至難の技で、1年目は15%台を達成するのがやっとだった。割れ米対策として、①できる限り未熟米、藁ごみ、異種穀粒を取り除くこと、②籾摺終了後、籾選別の段階で玄米が籾摺機に混入しないように監視すること、③精米時、圧力をかけすぎないようにする、といったことを心がけ、2年目はやっと25%まで伸ばすことができた。会社では相当喜んでくれたが、私としては満足できない。品質もそれほどよくはなく、割れ米が多すぎる。同僚達と割れ米を防ぐ方法について何度か話し合ったが、らちがあかなかった。彼らの間では、例え割れた米でも食べられることに変わりはないとの考えが強く、割れ米対策についてあまり真剣に考える必要もなかったのだろう。

それに米は市場で人気が高く、作れば割れ米だろうと何だろうと買い手がつく。このような状況の中で、割れ米を防ぎ、品質のよい米を精製する方法を議論しようとしても、所詮無理な話かも知れない。しかし、私には技術者（未熟ではあったが）としてのプライドがあり、いい米を精製したいという気持ちがあった。彼らにもそのようなプライドを持ってほしかった。

精米機は、操作に関しては難しいが、構造的には簡単で、整備はそれほど難しくなかった。しかし、スペアパーツのストックがほとんどなく、満足のいく整備はできない。故障により何日も操業がストップするのはしょっちゅうだった。故障といっても、ただ部品を交換するだけで直ってしまう故障ばかりで、何とかあり合わせのものを使って修理したが、不完全な修理しかできず、故障のたびに歯がゆくてイライラし通しだった。

しかしよく考えれば、スペアパーツが豊富にあって簡単に手に入るのなら、当然彼らに修理できるはずで、私など必要ない。何もないところで彼らと話し合い、知恵を出しあって修理してこそ意味があった。不完全でも本当の整備と言える。日本での整備などほとんどが部品交換であって、部品交換しかできない者は、機械屋とは言えない。私は一人相撲をとっていたのだと気付き、反省させられよい勉強になった。

また、精米機の動力源は電気なので、電気系統の故障もたまにあった。電気にはあまり強くないのだが、故障のたびに私が修理しなければならなかった。慣れない電気が相手だけに、何度か感電しそうになったし、スイッチの接触不良といった簡単な故障でも、関係のない所を一生懸命いじっていたりで、何ともお粗末な電気屋ぶりだった。しかし、これもまた知らない分野への挑戦ということで、よい経験になった。

ナシア・ライスでの2年間、同僚達に改まって精米機の操作や整備について教えることはできなかった。いつも私があたふたと走り回っていただけだった。彼らには申し訳ないが、私にとっての精米の勉強だったようにも思う。何も知らなかった精米機も扱えるようになったし、その他いろいろなことを学ばせてもらった。しかし教えられるところまではいかず、ナシアの同僚達に対し、本当に申し訳ないと思っている。将来、またこのような機会を得ることができたら、もう一度ナシアで働きたいと思っている。

（了）

福永郁夫 Ikuo Fukunaga

派遣国：ガーナ
職　種：農業機械
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1988年1月～1991年1月）
出身地：鹿児島県
初　出：「機械化農業」1988.12.1（(株)新農林社）

初仕事は機械の掃除

私の勤務するナシア ライス・カンパニーは、ガーナの首都アクラから約500km離れた、タマレという5番目の都市にある。ナシア・ライスは半官半民の精米会社で、同社が所有する精米プラントは、10年前に日本からの援助で寄贈されたもの。この精米プラント（精米機＝佐竹製、パーボイルド施設など）の保守・整備が私の仕事である。

私がタマレに赴任したのは乾期で、ミリング・シーズンの終わり頃だった。その時、会社には前回のミリング・シーズンに精米した米がたくさん残っており、それを売らないことには籾が買えない状態。そのため、会社の精米機は埃をかぶっていた。そこで、いつでも稼働できる状態にしておくため、精米部門のシニア・スタッフと話し合い、精米機の埃をはらったり、ネズミの死骸やワラ屑を取り除いたりといった清掃作業を行った。

清掃の後は、各部のグリスアップやベルトの張りの調整を計画していたが、実行できたのはベルトの調整だけである。というのは、グリスの在庫がなく、それもいつ購入できるかわからない状態だからだ。そして一通りの掃除調整が終わった頃、米の買い手がつき、それからは在庫米の再精米の連続となった。しかし、在庫米が大量にあるというのに、精米機の稼働時間は1日4時間程度だ。電気供給を会社のジェネレーターで行っているため、金のかかるジェネレーターを終日稼働させるわけにはいかないのである。

5月の末には、申請してあった精米機のパーツがJOCVのガーナ事務所に届いたので、早速パーツ交換を行った。メインシャフトのナットに合う道具がなく、交換に1日を要したが、調子は上々で、テスト運転では以前のような異音やモーターの加熱などはなくなり、あとは乾期作の籾を待つばかりとなった。

パーボイルド挑戦

その乾期作の籾を待っている時に、精米機のシニア・スタッフからパーボイルド施設の問題を持ち掛けられた。パーボイルドというのは、いったんお湯に浸ける前処理のことで、これにより、含水率が低い籾を脱ぶする際に生じる胴割れを防ぐことができる。問題というのは、パーボイルドを行う時のタンク内の温度の不均一で、その解決策を協議した結果、タンクへのお湯の入れ方を従来の上からでなく、下からに変更することにした。そのため、従来使用していたポンプでは容量が足りず、新しく購入しなければならないポンプとモーターの容量を計算したが、まだ購入には至っていない。

6月に入ると、乾期作の籾が搬入されてきた。含水率測定器を持って搬入された籾の含水率を測定し、13%から15%の間の籾を次々と精米する毎日である。そしてこの時も、精米機は1日4時間ぐらいの稼働だった。精米した米は床に広げて乾燥させ、1日か2日後に袋に入れるという手順で約1カ月くらいで精米を終了。今回は籾の購入は少なく、精米した米もすぐに売れてもう少ししか残っていない。

精米終了後、米の貯蔵庫の改造にとりかかった。雨期の間は倉庫の温度が非常に高くなるため、米の長期貯蔵が難しいからである。改造の方法はマネージャーが考えていたので、彼の案に基づいて進めることになった。その案とは、ブロアーとヒーターを用いるもので、ブロアーは使用されていないものを壁から取り外してなんとかしたが、そのケーシングとダクトのコネクト部分は作らなければならない。ケーシングの径とダクトの径を測り、それを基に設計した。コネクト部分は円錐の上部を切り取ったようなもので、溶接工員と一緒に2日がかりで作った。今はブロアーのケーシングを取り付ける穴を壁に開けている最中である。

これが、今までに行った精米部門に関する仕事内容である。このほか稲作隊員のほうから、ファームに水を張った後、トラクターがその中を走行できずに困っているとの相談を受けているので、後輪を片方に2個ずつつけて、次の雨期に走行テストを行う予定でいる。

（了）

富岡丈郎 Takeaki Tomioka

派遣国：コスタ・リカ
職　種：農業機械
隊　次：昭和60年度1次隊（活動期間1985年7月～1988年7月）
出身地：東京都
初　出：「機械化農業」1989.3.1（（株）新農林社）

立ち遅れた整備技術

コスタ・リカは、20世紀中頃のコーヒー、バナナのプランテーション農業導入によって、急激な経済成長を成し遂げた国で、農業機械も、それらの大農場を通じて普及してきたものである。従って、農業機械は欧米型の大型トラクター、大型コンバインが主流になっている。また、近年もBID（米州開発銀行）などの援助によって、農牧省（日本の農林水産省にあたる）や各大学などの諸機関に、数多くの農業機械が導入されている。

しかし、導入数の割に整備技術の水準は低い。農業機械専門の整備士は存在せず、自動車整備工（彼らの技術もそう高くはない）が整備する場合がほとんどだ。整備技術のレベルの低さは、自動車やトラクターなどの機械類が急激に増えたことに起因しており、そのためにこの国の農村地域を回ると、整備不良で野ざらしにされたトラクターを畑の隅などで見かけることが多い。

手を汚さぬ高学歴者

整備技術の向上が立ち遅れているもう一つの原因として、学歴の障壁が考えられる。

着任当時、スペイン語を自由に使えず大学の西も東もわからない私は、同学科の教授たちの授業を聴講する毎日だった。その授業で驚いたのは、内容の水準の高さであった。理論中心で難解で、「こんな所で私に何ができるだろうか」と、目の前が真っ暗になる思いであった。しかし数カ月が過ぎ、この国のことが少しずつわかる頃になると、実習や実技が必要な工学科の授業でも、ほとんど実習時間がないことを知って再度驚くことになった。結局、教授たちは、実践をほとんど無視した机上の理論を伝えることに終始しているのである。実際、私のそうした見解に対して、彼らの多くは口を揃えたように「手を汚す仕事（農作業や保守整備）はカンペシーノ（百姓）やメカニコ（整備士）の仕事だ！」と言う。

この国には、このように学歴による職種の偏見も存在し、教授や学生の理論と整備士の技術との間で情報交換が行われることは極めて少なく、このことが、整備技術の低さにも大きく関わっていた。

理論と技術を結ぶ

こうした現状のなかで、学究者と技術者をつなぐ指導者が求められている。農村を巡回すると、必ずそういった相談を受けた。また、学科の学生たちの中にも、よい就職先を得るために、実践力を身につけようといった考え方を持つ者も増えてきた。

現在の私の仕事は、主にトラクター免許講習会で、1週間の講習（理論10時間、実技10時間）で、65点以上の者にトラクター運転免許を交付。保守点検の実施と安全運転の実行を二大柱として、公道での適正運転を目的として行っている。学生たちの評判はなかなかのもので、今後の大学の講義や実習の中でも、大いに実践を取り入れようと思っている。

またこうして免許を取得した学生たちが、少しでも"手の汚れる仕事"に勤しみ、理論と技術の橋渡しをする指導者になってくれたらと願う毎日である。

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野に亘り、それぞれ活発な活動を展開している。

（了）

出井　努 Tsutomu Dei

派遣国：パプアニューギニア
職　種：農業機械
隊　次：平成3年度2次隊（活動期間1991年12月～1993年12月）
出身地：埼玉県
初　出：「農機新聞」1994.4.12／4.19（（株）新農林社）

狂暴なる仲間と

<1回目>

新たな夢を求めて

私は青年海外協力隊、農業機械隊員としてパプアニューギニアの農業大学で講師兼インストラクターとして2年の月日を過ごした。

パプアニューギニアに派遣される前は、携帯電話の製作会社で設計の仕事をしていたが、満員電車の中で見掛けた協力隊のポスターが私の決心を固めた。

ポスターの中では、目と歯の白さが協調された色の黒い子供が、全てに満ち足りたような微笑みを投げ掛けていた。現実の電車内の空気とかけ離れたその顔を見ているうちに、学生時代、協力隊の説明会へは足を運んだものの、参加へと踏み切れなかった自分を思い出した。そして、これに参加していれば、今頃は自分が本当にやりたいものを見つけられていたかも……と思い始めたのが再度協力隊にチャレンジするきっかけだった。

さて、それから見事に協力隊の試験には合格したが、私には農業機械の職歴が無い。そこで、一定期間で不足の技術を補うための技術補完研修を、3カ月の間、愛媛県の農家に住み込みで行った。

町で生まれて育った私は農家での生活にカルチャーショックを受けた。3世代の同居、近所の付き合い、そして田んぼ仕事。自分の知識の狭さをあらためて思い知らされた。

東京での語学訓練も終わり、隊員がそれぞれの任地へと旅立つ時が来た。私は晴れてパプアニューギニアでの活動が始まった。

異国での協力隊員

当初は予定されていた講師の仕事がなかったので、数少ない農業機械の整備の他に、日本語教室を開催した。何よりもまず、生徒に触れてみたかったからだ。

機械整備に関しては、配属先には9台もの壊れた工作機械があり、これらの共通した故障原因はすべてモーターであった。

しかしこちらのエンジニアは電気製品の修理を怖がりモーターが止まってしまうとなぜかコードを切断してしまうので、長年の間放置されているものがほとんどであった。

さっそく修理に取り掛かるものの、思うように仕事が進んでくれない。それは言葉の問題、文化、さまざまな要因が考えられるが、何よりも彼らの流儀を掴み切れないというもどかしさがあった。肌の黄色い外国人ということで、皆が私に注目をしていた。

確かな足跡を残すために

2年目に入り、職場の同僚が「風力発電を作ってみたい」と言い出した。作業小屋帰りに聞いたその彼の一言が私の活動を変えた。

自由に使える時間はたっぷりあったので私達はさっそく、オートバイのスクラップや廃材を集めて風力発電の構想を練った。ちょうどその頃、協力隊の月刊誌に風力発電の記事が掲載されていたので、早々に日本の両親に手紙を書き、その記事に紹介されていた本を送ってもらい参考にした。

しかし私の作った風力発電では、評判にこそなれ実用性はなかった。風が強く吹かないのだ・・。

<2回目>

次に私が作り始めたのは、バイオガスプラントだった。豚や牛の糞からメタンガスを取り出し、調理や照明への有効利用を考えたのだ。豚を貴重品として大切にしているパプアニューギニアでは願ってもない技術だ。

しかし、この製作においても決定的な資料を収集できなかった。日本で捜してもらった本も、そのほとんどが廃版になっていた。

その時、"もしや"と思ったのが、足利工大の牛山教授であった。牛山教授は、風力発電の記事を協力隊の月刊誌に執筆されており、さっそく教授に手紙を出して尋ねたところ、ありがたいことに、たくさんの資料を送っていただいた。

バイオガスの製作は、たまたま豊富にあったセメントを使用し、建設用のブロックを作ることから始めた。南国のスローなペースのおかげで、製作には非常に長い時間を費やした。結局、完成までに3ケ月もかかってしまった。

完成後、バイオガスに関する講習会を行った。2年

間で初めての授業だった。それと同時にパプアニューギニアの農業雑誌にも私の書いたバイオガスの記事が掲載されることになった。

手探りで始めた活動ではあったが、それなりの成果は出せたと思っている。バイオガス完成後、皆でパーティーを開いた。酔っ払うと凶暴になる友達たちに気を配りながらも、夜遅くまでパーティーは続いた。

その時初めて、協力隊に参加してよかったと、心から思うことができた。

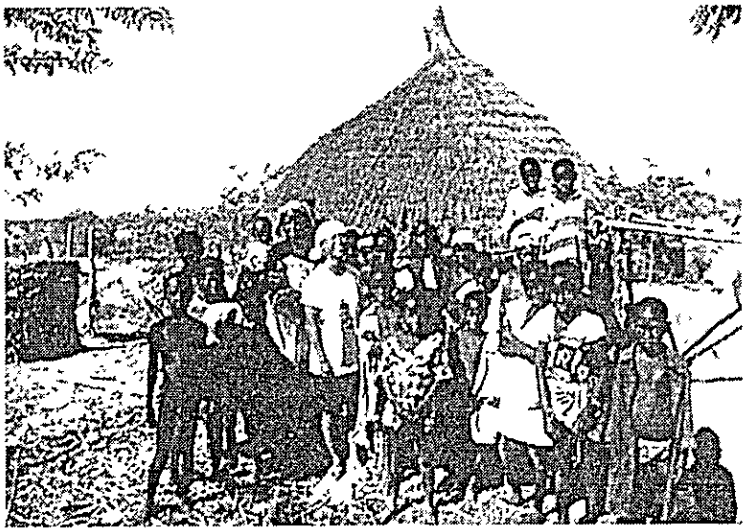
将来を決定づけたもの……

任期を終えて日本へ帰ると、さっそく足利工大の牛山教授を尋ねた。私は帰国後の進路として大学院で自然エネルギー利用の勉強をすることに決めた。将来は、国際協力の専門家になる目標を持ち、現在はそのための勉強を始めている。どうやら、協力隊員としてパプアニューギニアに赴いた、私の人生において大きな転換点になったようだ。今後も私の中で、協力隊員として活動した2年間は、大きな意味を持ち続けてゆくであろう。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

農業協同組合・村落開発普及員



〈農業協同組合〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	2	0	0	0	0	1	2	0	1	2	1	9
ラオス	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
マレイシア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
フィリピン	4	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	7
スリ・ランカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
タイ	1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	4
〈アジア地域〉	10	1	1	0	1	2	3	0	1	3	3	25
ザンビア	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
〈アフリカ地域〉	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
コロンビア	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
コスタ・リカ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ニカラグァ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
パラグァイ	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
〈中南米地域〉	7	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	10
合　計	17	2	1	0	1	3	4	0	2	3	3	36

〈村落開発普及員〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	1	3	1	3	2	2	1	2	2	1	5	23
インドネシア	0	0	0	0	0	3	2	3	2	5	2	17
ラオス	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
マレイシア	5	4	1	0	1	0	0	1	0	0	0	12
モルディヴ	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	3
ネパール	3	0	0	0	0	0	4	6	9	1	6	29
パキスタン	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
フィリピン	3	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	6
スリ・ランカ	2	0	1	1	0	4	1	1	3	1	3	17
タイ	0	0	0	0	1	0	0	1	1	3	1	7
〈アジア地域〉	15	8	3	5	5	10	8	15	18	12	17	116
モロッコ	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
〈中近東地域〉	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
ボツワナ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2
エティオピア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ガーナ	9	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	14
コートジボアール	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
ケニア	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	3
リベリア	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
マラウイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
ニジェール	0	1	1	1	0	1	2	0	2	0	2	10
セネガル	0	0	2	0	4	1	4	0	5	5	0	21
タンザニア	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
ザンビア	1	0	2	0	1	0	1	0	2	2	1	10
ジンバブエ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
〈アフリカ地域〉	17	4	6	2	7	3	8	1	10	12	6	76
チリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
コロンビア	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
コスタ・リカ	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	3
ドミニカ共和国	1	0	0	1	1	2	0	1	0	0	2	8
エクアドル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
エル・サルヴァドル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
ホンデュラス	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
ニカラグァ	0	0	0	0	1	0	0	1	1	2	2	7
パナマ	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	2	6
パラグァイ	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3
〈中南米地域〉	9	0	1	3	5	3	0	3	2	6	10	42
フィジー	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3
パプア・ニューギニア	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	6
サモア	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
ソロモン諸島	0	1	2	0	3	0	2	0	1	1	0	10
ミクロネシア	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
ヴァヌアツ	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3
〈オセアニア地域〉	0	1	5	0	5	0	5	5	2	2	1	26
合　計	41	13	15	10	23	17	21	24	32	32	34	262

多勢伸一 Sinichi Tase

派遣国：マレイシア
職　種：農業協同組合
隊　次：平成元年度2次隊（活動期間1989年11月～1991年11月）
出身地：福島県
初　出：「農村報知新聞」1991.9.18（（株）農村報知新聞社）

夕闇が迫る頃になると、モスク（イスラム教寺院）からの祈りの時間を告げる呼び声が響きわたる。首都クアラルンプールから北西へ約200km、ペラ川下流の湿地帯に開かれた広大な入植地が私の任地である。赴任当初は、農業協同組合活動のアドバイザーとして連邦土地総合整備公団本部に配属し、その後入植地管理事務所への転任となった。この公団は農村部の地域開発と貧農の所得向上を目的として、荒廃した農地の復旧整備と入植事業を行い、具体的には、オイルパーム ゴム・稲などを栽培している。

まずは、身近なところから手を付けていこうと、入植地にある協同組合が経営している購買店舗とガソリンスタンドを手伝いながら、入植者に顔を覚えてもらおうと考えた。入植者の生活は貧しいというほどでもないが、収入は限られているので、店の売上げ（組合員の掛け買い）を増やすことは必ずしも良いとは限らない。そこで、店内の仕事を効率よく進めることや、品揃えを増やすことなどを助言することにした。時には早起きして市場の仕入れに同行したりもした。

その他に、入植地の協同組合と協力して活動することはできないだろうかと考えた結果、最も有効な方法は他の隊員と連携して公団本部に対して働きかけるということになった。幸いなことに他の入植地にはケチャップやチリソースの生産指導をする隊員と、パンや土産品の市場調査・販売指導を行う隊員が配属されていた。折からこの入植地で、隊員親睦会が主催する餅つきイベントを行うことが決まっていた。そこで隊員と話し合った結果、この機会を利用してケチャップのプロモーションを行い、その余勢を駆って販売方法についての講習会を開催しようということになった。

餅つきの当日は大勢の観客が集まり、30名近い隊員有志が総出で対応した。プロモーションとしては、この前々日に購買店舗での浴衣着用の女性隊員による試食宣伝、当日は会場の一角で特売を行ったのだが、餅つきの準備に追われてしまい、プロモーション自体は少々尻すぼみとなってしまった。

それから2カ月後には、なんとか講習会の開催にこぎつけた。私自身の仕事は開催に至るまでの根回しをすることだと考えていたが、突然講師も勤めるということになってしまった。各隊員の任地が遠く離れているうえに、州によっては休日が異なるという事情が重なって、当日の朝になってようやく全員揃っての打ち合わせという冷や汗ものの舞台裏だった。講習会の内容は十分ではなかったが、これを契機として、職員や入植者がこのような各地の実情に合わせた小規模の講習会の実施や、他の協同組合との情報交換、業務協力などを考えるようになれば、今回の成果としては十分であろう。

このような試行錯誤の活動をしてきたのだが、農業協同組合という職種で派遣されてきたからには、やはり農業生産活動の組織化のような仕事を手掛けてみたい。ここには野菜作りを始めた第2世代の若者達がいるので、彼らをグループとしてまとめ、この仕事に定着させていくことはできないだろうか。とはいえ、彼らはそれで生計を立てようというよりも、村の青年団の活動というような雰囲気で取り組みだしたところだし、現在は、仕事をしているというよりも日本語やマレー語を教え合ったり、一緒にキャンプに行くなど、彼らと遊んでいるという雰囲気である。いずれ収穫物を販売することになれば問題も出てくるであろう。しかし、それまではあまり先を急がずに、マレーシアのペースでゆっくりと進んでいくことにしよう。

（了）

上山則夫 Norio Ueyama

派遣国：パラグァイ
職　種：農業協同組合
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：岩手県
初　出：「農村報知新聞」1989.12.8（（株）農村報知新聞社）

パラグァイは、南米大陸の中央部のやや南寄りに位置し海の無い小さな内陸国で、面積は日本の11倍、人口370万人の農業国です。季節は日本と逆で日格差と降雨量変化が非常に激しい大陸性気候で四季の変わり目は、はっきりしておらず1年の3分の2が夏です。

パラグァイ人の農業にはあまり計画制が無く、今日の仕事は今日決める「明日主義」（今日できる仕事を明日にする）の習慣がパラグァイ農業の発展を妨げている要因の一つになっています。しかし、大豆、麦、綿花は国の経済を支える輸出品目の中心となり、畜産においては肉牛の放牧が盛んで人口の3倍も牛がいると言われています。日系人やドイツ移民は、パラグァイ農業に大きく貢献し大規模農業経営を行い、特に大豆は日系人がパラグァイに持ち込み普及したもので、現在パラグァイの重要輸出品目となり高く評価されています。

私の任地ラ・コルメナは、人口5000人（内日系人400人）の小さな町でパラグァイでは一番古い日系移住地でもあり、3年前には移住50周年を迎えた唯一の戦前の移住地です。一農家平均40ヘクタールの所有面積で実質平均耕作面積は5～10ヘクタールで果樹、野菜、養蜂が中心です。私が仕事をしている農協は、組合数60名と非常に小さく、農産物生産面積は305ヘクタールでブドウ酒の醸造工場（年間生産能力70万リットル）や数多くの資産を持ち、職員数15名と組合数からは想像出来ない経営をしています。

ラ コルメナ移住地を農業技術面から見ると、営農類型や作型が明確ではなく、いつでも作物が生育し、トマトを例にすると10作型以上もあり、自然状態でいつでも直播出来、どの作型が一番多収穫で収益性、経済効率が良いのか統計的に把握されていません。ラ・コルメナ型農業類型確立、そして営農技術、組織力向上のため私は営農指導として土壌肥料と経営指導を、組合組織指導として農協教育委員会、青壮年活動、園芸部会活動を行っています。

移住地内の土壌を調べて見ると、概ね砂質土で高台から低地に向かって赤褐色土、褐色土、薄褐色土となり草地に入り黒色土の沖積土となっています。土性割合は植土20%、壌土15%、砂壌土50%、砂土15%で表土は60～80cm、その下に赤色粘土質が4～6mもあり砂質土とはいえ低地は地力があり米作にも適しています。しかし、果樹、野菜畑は、やや高台の赤色砂壌土が多いため腐食は少なく弱酸性土壌で肥料分の流亡が多く、微量要素欠乏に悩まされています。褐色土壌や黒色土壌の草原地は放牧のみに利用されています。

土地生産性の高い集約農業を行うには、第1に土作りが必要ですが、パラグァイの化学肥料はとても高価で、物価水準を日本に置き替えると日本の4倍もの価格となり、日本の無償援助肥料でさえ農家には市価に近い価格で販売されるという政治的問題もあります。

組織活動においては、2世の方々の活動の場として青壮年グループを組織するすることを目標にし、農家経営指導においては、組合員が簿記記帳により自分の家の経営内容を把握し、次年度の経営計画を立てれるようになることを目標に置いて仕事をして来ました。任期が残り半年になった時、どうにか青壮年グループの結成に至り、第1回目の集会を開催しました。現在は、毎月1～2回土曜日の夜集まり農協論、農協定款、農協事業、経理等の勉強会や農業問題についての討論会などを行い、帰国を前にしてようやく軌道に乗り始めたところです。

しかし、何か農協の指導事業としてはまとまりが無く、担当部署、担当者の所在が不明確なため私の帰国と同時にこれらの活動が自然消滅する可能性もあり、色々と考えた結果、全ての組織活動（園芸研究部会、青壮年グループ、職員会議、各種講習会、代表者会議等）の基礎を教育委員会に一極集中することを理事会に提案しました。教育委員会の活動費は、今まで剰余金の10%が運用されていましたが、剰余金の少ない年度は次年度の教育活動が出来なくなる可能性もあるので、剰余金の10%を考慮しながら計画予算事業として行うことも合わせて協議中であり、11月の農協総会で本決定することと思います。

現在、教育委員会における各部門のリーダー育成と総会の準備を中心に仕事をしていますが、組織活動としての教育委員会事業は、今やっとつぼみを付けたところで、私の2年間の協力隊活動は終わろうとしています。このつぼみを大きく開花させるためにラ・コルメナ農業協同組合の役職員、そして、組合員の皆様に一層の活躍を期待しているところです。

（了）

酒井強志 Tsuyoshi Sakai

派遣国：バングラデシュ
職　種：村落開発普及員
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年3月～1992年3月）
出身地：神奈川県
初　出：「海外新聞」1992.6.25（(社)日本海外協会）

平成元年度第3次隊としてバングラデシュに派遣され、村落開発普及員として活躍の酒井強志隊員の原稿を入手したのでここに紹介する。

*　　*　　*

バングラデシュにはごみ箱がない。町中、店、事務所、家、食べ物屋でも灰皿すらない。ここにはごみ箱のない生活文化がある。

それは基本的にごみ自体がないという事だろう。まず紙、新聞、雑誌等は日本のように溢れていない。必要のないダイレクトメールや広告の類はなく、事務所では1枚1枚の書類がすべてファイルされ、新聞は全ての種類の店で包装紙となる。雑誌等は捨てられる事なくまたどこかの露店や、駅で売られる。もっともティッシュペーパーを使う習慣などなく、トイレも紙を使わずに水で洗い流すようになっている。

食物に関しては残飯、生ごみ等次から次へと外に捨てられる。残飯は冷蔵庫を持たぬためかえって多く出そうだが、この国の人は毎回必要な分しか作らず、そういう問題も起こらない。そして生ごみの切れ端、果物の皮、魚肉類の骨は表にいる山羊、犬、猫、ねずみ等の動物、昆虫によって処分され、最終的には又、地中へと帰ってゆく。そして日本でも問題となっているカン、ビン、プラスチック、ビニール等はゴミにならない。これらの工業品はこの国では極端に少なく半永久的に利用され続ける。買物袋も各自が用意して市場へ行くし、別の全てのものが量り売りで各容器が必要となる。この国は回教の国で特に酒が禁止されている為に空きカン、空きビンは少ない。

この国にはまだ多くの貧しい人々がいる。彼らは一般に土地もなく、仕事がない。そういう貧しい人の家には電気がなく料理もかまどが使われる。こういう家庭の女性、子供達が大きな麻袋を持って小枝やかれ葉、紙くず等の燃えるものを集めているのである。事務所、家庭で捨てられたごみは仕事でも、奉仕でもなく貧しい人の生活の為に生かされる。そして鉄くずやプラスチック、ガラス、ビニールも集められて町の店に帰っていく。それらはリサイクルとして修理や中古品の部品に化けていく。

今まで述べてきたように、この国では物である以上決してごみにはならない。何らかの形でお金になるか、自分に必要なくとも誰かが必要としている。こんな具合にごみの生態系が存在している。

ところがこの国でも都市の工業化、近代化によって、その構造も崩れつつあり、都市では不燃物の増加や、道路の舗装などによって自然の浄化機能が低下し、ごみが氾濫しだしている。地方の村ではまだこの生態系が守られているものの、都市の文化の流入によってこれが崩れることは必至である。

私はこの国の発展の為に協力隊に参加し、やって来た。しかし、これは先進国に生まれ育った人間のエゴかもしれないが、逆に今、日本で失ってしまった何かをこの国に感じる。今の日本を見ていると発展するという事は便利さの代償にとりかえしのつかないものを失っていくことのように思える。このまま歯止めなく発展して何の意味があるのだろうか。この後進国（現在はこういういい方をされないが、バングラデシュとはまだ、まさしく後進国である。）のよい所、すばらしい所を日本に持ち帰る事が私の役目だと思う。

（了）

武辺寛則 Hironori Takebe

派遣国：ガーナ
職　種：村落開発普及員
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1989年2月）
出身地：長崎県
初　出：「農村報知新聞」1989.2.28～3.18／1989.3.18（2回連載）（（株）農村報知新聞社）

＜1回目＞
試行錯誤の繰り返し

私は、昭和61年12月に青年海外協力隊員として西アフリカのガーナ国に派遣され、村落開発普及員として活動を続けている。日本人にガーナと言えば、まずチョコレートと思うくらいであろうがガーナにおいてカカオの栽培は昔も今も重要な産業となっている。また、野口英世博士が黄熱病の研究途中に急逝した国と言えば「ああ」と思いだされる方も多いと思う。

私の任地は、首都アクラから海岸線を西へ100km程行ったアチュワ村である。メインロードの分岐点より海側に8kmほど入った大きなラグーンの側の村であり、公称人口500名であるが、実際は250名程度の小さな村である。共同水道はあるが、殆ど水などでない。電気は発電機があるが、これも滅多に使えぬという。農業中心に自給自足に近い生活を営む、この村が私の任地である。

村落開発と1口に言ってもその内容は多種多様であるが、私の要請された背景は自給自足的村内において現金収入獲得の道となる物産の発見、普及をというものであった。

最初は何から手を付けて良いか全くわからず右往左往するだけであったが、とりあえず村落開発の一歩として、環境分析を最初の6カ月は徹底的に行った。内容としては村の規模、地理的位置、隣村との関係、定住率、農地の規模、作物、市場調査等である。この半年間の調査でアチュワ村のおおよそのことはわかるようになった。

この調査を行っている間に気づいた点が幾つかあった。村人は僕を東洋のマジシャンのように思っているのである。白人（村人から見ると日本人も白人である）に任せておけば、何でもうまく行くに違いないと思っているのである。こういう考えの原因には、いろいろな背景があるのであろうが最初はとまどったものだ。

村の運営は長老会が実権を持っており、すべての決議はここにおいてなされている。僕の村での身分上の地位は何と長老と同等というものであり、この長老会に参加を許されている。しかし実際にいろいろと仕事をこなして行くのは20～40代の壮年層だが、年功序列のはっきりとしたこの村では決定権がない。この他にも、いろいろと興味深い発見があり6か月はあっという間に過ぎていった。

そして、まず最初に手がけたことは長老会とは別に、壮年層を中心としてTDC（Town Development Committee）を組織化したことである。何事にも中心となる壮年層を一つの組織にまとめ、今後は彼らの中で話し合い、討論し決議できるようにし、最終的には長老会と合同で協議できるようにした。定期的に会合を持ち、村おこしのために何かできることはないか、また、村の問題点なども話し合った。初めの頃は、時間になっても人が集まらず、怒って「やる気がなきゃもうやめだ！俺は日本に帰る！」と脅し、自分の部屋に帰り、「早くあやまって呼びに来ないかな、もし誰もこなかったらどうしよう」と1人で悩んだこともある。よく考えれば、時計など村人は殆ど持っていないのである。「30分くらい遅れても仕方ないかな？」「いや、これくらい厳しくてもいいんだ」と何事も自分の価値基準との差を考えながら、試行錯誤の繰り返しであった。時間を守ることは会合の回を重ねるたびに良くなって行ったが、次の大きな問題は意見がでないことであった。

僕「みんな、村おこしの何かいいアイデアあるか？」
全員　・沈黙。
僕「ラグーンで魚の養殖やろうか！」
村人「そりゃあいい！」
僕「どんな方法がいいかな？やったことのある奴いるか？」全員　・沈黙。
僕「イケスにするか、養魚池を掘るか？」
村人「タケ（僕のこと）の好きなように」
僕「ところで、あのラグーン一年中水あるのか？」
村人　・「無い時もある」
僕「養殖するとしたら何やるんだ？アバトワ（ティラピア）か？」村人　「うん」
僕「アバトワのエサって何だろう？」
村人・　沈黙。
僕「もし収穫したらマーケットで売れるかな？」
村人・　・「売れる、売れる！」
僕「そーかあ？マーケットには海の魚が沢山ある じゃないか！」村人・・　沈黙。

しかし、これも無理はないのである。彼らは毎日

畑仕事の後、ラグーンで魚をとってはいるが、殆ど自己消費用であり、売るのはごく少量なのである。彼らは何かやりたいとは思っていても、何をどのように準備してどうすれば目的が達成できるかということを、村内の自給自足的生活のワクより広げた場合、知識、経験として持たないのである。それならばと今まで半年かかって調査したことを会合のたびにアドバイスして知識を与えつつ回を重ね、彼らも少しずつ自分の意見をはっきりいうようになってきた。

そして現金収入の増大をはかるために2つのプロジェクトを立案した。1つは日銭を稼ぐための養鶏、もう1つは将来的に村の換金作物の中心となることを目標としたパイナップルの栽培である。

<2回目>

人と人とを結ぶパイプの役割

養鶏は、村の中の廃屋を利用して鶏舎とし作業の手順を学習するために村人の中より2名のカウンターパートを選出し、彼らが実際に鶏の世話を行うわけである。

村人達の共同作業により鶏舎は完成し、孵卵場よりレイヤー種50羽を購入した。僕は村人に、この50羽はあくまでもデモンストレーションだと言い聞かせ、できる限りコストを抑えるため、最少限度の手間しかかけないつもりであった。ここは水道も電気も使えない村なのである。エサもできる限り自給するつもりであった。保温はランプで、水は雨水を、エサは緑草を多くとアチュワ式養鶏を確立すべく、いろいろと試してみた。しかしワクチンは最低の知識として教えプログラムにのっとり、すべて接種させた。幸いカウンターパート2名は非常に熱心であり、白蟻を取ってきて与えたり何種類もの草を与えて、どれを1番よく食べるかなど彼らなりに研修し頑張ってくれた。他の村人も毎日鶏舎を訪れては、あれこれと世話をしてくれた。しかし予想通り、スパルタ式飼育のため、各個体の成長は遅れ、150日を過ぎ、もう卵を産んでもいい頃になっても仲々産んでくれず、僕達をやきもきさせた。

そして、最初の卵が産まれた時は、カウンターパートは感激のあまり緊張し、ついには落として割ってしまうという悲劇を招いたが、今は順調に産まれている。今後は養鶏方法だけでなく、卵の販売を通じてコストも考えたマネジメント等をOJT（オンザ・ジョブ・トレイニング）方式で普及させていくのが重要な課題として残っている。

もう1つのパイナップル・プロジェクトは元々村人が細々と少しずつ村内で行っていたのだが、アチュワ村の地の理（消費地としての首都アクラに近い）、品種が良い（ガーナでファンティ種と呼ばれ人気がある）、気候、風土に合っていて栽培が容易である、すでに実績があるなどの長所を生かして、村の換金作物として目玉にしようと試みているものである。これも今までは収穫物を各人ばらばらに売っていたのを、村全体でまとめてアクラに出荷したり、製缶業者に卸したりと、安定した現金収入になることを目標としている。そのためにも、今まで名ばかりであったパイナップル協会を再編成し、参加している村人の真剣さを促すため、会費を徴収したりと、村人と協議し仕事を進めている。村人達もパイナップルに関しては知識があるため、1度動きだすと活発な意見もでて熱心である。パイナップルは作付から収穫まで約2年間かかるため、息の長い、そして根気のいる仕事である。途中で息切れしないためにも、今年の収穫後の販売方法や、育成中のパイナップルの品質管理など慎重に進めたいと思っている。

私がガーナに来て1年半が過ぎた。これまでを振り返って思うのは、村落開発という仕事は人と人とを結ぶパイプのような仕事だと思う。村人は何をしたらわからないのではなく、何をどのようにしたらわからないのである。僕自身ガーナに来るまでパイナップルの栽培はもちろん、養鶏などもやったことはなかった。それが何とかやっていけるのは、僕らにいろいろと手助けしてくれた農業省のスタッフ達や獣医さん、そして同じ協力隊の仲間達のおかげであった。

僕と村人の差は、僕がほんの少し知恵を借りる方法を余計に知っているにすぎない。村からの要請で僕は任期を1年延長した。残りの任期の中でどのくらいの人と人とを結んで、仕事を進めることができるか？村人が自主的に考え、立案し、組立て、行動すること、これが村落開発普及員としての僕の目標である。

（了）

新岡隆二 Ryuji Nioka

派遣国：ガーナ
職　種：村落開発普及員
隊　次：平成元年度2次隊（活動期間1989年11月～1993年3月）
出身地：埼玉県
初　出：「海外新聞」1992.1.25（(社)日本海外協会）

たかが、ブロック作り3000個にこうも手間がかかるとは。日本だったら機械を使って1日何百何千個と作ってしまうんだろうな。いや、ブロック製造用機械は首都アクラで古いやつを見たことがある。が、ここは小村。電気・水道無し。試しに井戸を掘ったら塩水がでてきた。ガーナでも田舎度のトップを争うひなびた地。ギニア湾より6キロ程離れた、人口約500と少しのこのアチュア村で機械が使えたらと嘆くほど馬鹿げた事はない。

木材を買ってきて村の大工に木枠の制作を依頼。これにセメントと砂と水を混ぜた物を流し込んで、アフリカの太陽に当てて乾かしブロックを作るのだが、セメントは木材同様、20キロ離れた街より買ってくればよい。水は村から少し先の川の近くを作業場とすることで解決。問題は砂。村の長老に相談すると、川から運んでくれば良い、と事もなげなお答。つまり、潮の満ち引きによって川の水量も大きく変化するので干潮の時に出来る中州の砂を削り取って岸に運んでしまおうというわけ。

村の長老達にはなんともないことだろうが、時間を買って生きている日本人、特に任期の定まっている自分からすると、これはたやすいことではない。なぜなら、人夫になっていただく村人のほとんどが自分達の畑を持つ農夫なわけで、そちらの作業を休んでもらって無報酬で（村のためだと説得して）土方仕事に参加してもらっている情けない現場監督としては、村人を多数集めるために、習慣的に農作業を休みとしている金曜日を砂堀り日に当てるしかない。その日だって約20パーセントのイスラム信仰者は寺院に行ってしまうのだが、後の大半が教会へ行ってしまう日曜日を当てるよりは良い。

さて、天候に恵まれ、うまい具合に水量が減って、村で祭礼や祭式が無い（あろうものなら仕事に集まりなどしない）金曜の朝、その日は砂堀作業そのものが村の祭りとなる。

男達がスコップを手に川を渡ってゆく。周囲約30メートル、高さ数センチしか水面に出てない中州だけれど、スコップでもって周囲を掘って真ん中に砂山を作れば軽く1立方メートルにはなる。続いて川の水をおへそまで浸して渡ってくる女性達は、バケツやヘッドポンドと呼ばれる巨大な中華鍋を頭に載せている。力仕事には自身があったはずだが、彼らの体力にはとてもついてゆけない自分は、もっぱら彼女達の持ってきた容器に砂をすくい入れる仕事。砂で重くなったはずのバケツや鍋を、彼女らはひょいと頭の上に載せて来たときと同様に陽気な調子で岸に戻ってゆく。頭の上には真っ黄色の太陽、目の前には水に濡れて砂にまみれる男達、女達。ああっ、協力隊してるなっと感じるささやかな幸福の時。

砂が揃ったところでブロック作り開始。村人を3つのグループに分けて、それぞれ火・水・木の各曜日に参加してもらい、金曜日は全員参加の砂堀デイ、ということで村人と合意。こう言うとなんだか労使協約でも結んでいる様だが、実際は「やれよ」と「やって下さい」を使い分けている手配師にすぎない。

そうそう、言い忘れていたが、このブロックはもちろん遊びに使うのではなく、ガーナの明日をひょとしたら担う子供たちのための保育園建設用のもの。この保育園はブロック作りを終えてから約1年後に完成をみた。まあ、3000のブロックを作るのに3ヶ月を要したわけで、あとの苦労は推して知るべし。とはいえ、出来上がったときの喜びはアフリカ大陸並の大きさ。その日は村人達と飲めや踊れやの騒ぎ。俺みたいなやつでもちょっとは他人の役に立ったのかなと思える瞬間。そう、このためにアフリカへ来たんだからね。

（了）

相馬多一郎 Taichiro Soma

派遣国：コロンビア
職　種：村落開発普及員
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：静岡県
初　出：「日本農業新聞」1990.1.5（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回は、その一つ、コロンビアの「チキンキラ生活向上組合」で、組織・活動の充実のため相談業務に活躍している隊員のリポートを紹介する。

*　　*　　*

【相馬多一郎隊員の報告】

チキンキラ市は、コロンビア共和国の首都ボゴタの北約130キロに位置する。そこへ私は、チキンキラ生活向上組合の組織・経営・活動の充実のため、組合管理行政局から相談役として二年前に派遣された。

当該地区は、海抜2,600メートル、平均気温15度Cと高原野菜栽培に適しているが、主食のバレイショ、トウモロコシ、豆類など、山間部の傾斜地で細々と自給自足農業を営んでいた。当然、土づくりや施肥・防除・除草などは行っていないのが実情であった。

しかし、時代の流れには逆らえず、現金収入の必要性が増えはじめ、特産果物「クルーバ」など換金作物の栽培も行われはじめた。そこでの私の任務は栽培技術指導ではなく、まず、山間地の地の利を生かした簡易給水システムの普及であった。

このシステムは、簡単に施行でき、しかも土壌流亡を防ぎ、乾期の水不足の解消など多くのメリットがあったにもかかわらず、農民の反応はつめたかった。

しかし、一年前から、家族数、教育状況、作付状況、所有地面積、飼育家畜数、健康上の注意点などの調査を一軒一軒行っていくうちに次第に理解をしめしてくれた。また、日曜学校などで、おりがみ教室などいろいろな体験をともにし、心を開いてくれてきたのも、調査をスムーズにさせたと思われる。

残念ながら、私は初代隊員なので、この地に形として残せる物はなかったが、調査結果を今後の活動に役立たせてくれるのを願いつつ、また、たくさんの友情をカバンにつめ込んで帰国できそうである。

（了）

粟野久夫 Hisao Awano

派遣国：ホンデュラス
職　種：村落開発普及員
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1988年12月）
出身地：栃木県
初　出：「農村報知新聞」1990.3.28（（株）農村報知新聞社）

昭和62年2月、ホンデュラスに派遣された私は、協同組合助成局（以下助成局）のチョルテカ事務局に配属された。赴任当時、チョルテカ県ではJICAの無償援助による総合モデル農村開発計画が進められており、私は助成局の普及員と共にプロジェクト地区の巡回を開始し、地区概要の把握に努めることになった。

このプロジェクトは、乾季の農業用水確保をメインにした生産活動・生活環境両面にわたる開発計画で、助成局は正式の推進メンバーではなかったが、農民の組織強化という観点からオブザーバー的に参加していた。

ところが、協同組合に関する法律の改正に伴い助成局の組織変更が行われ、本部職員若干名を残し、地方事務局はすべて閉鎖されることになってしまったのである。現地に配属されて二か月余り、右も左もまだよく分からないままに私の活動の基盤となる事務局が閉鎖され、私の村落普及員としての活動は大きな暗礁に乗り上げてしまった。

さぁーて、どうしよう。大いに焦り、悩んでしまった。助成局本部からチョルテカにとどまり農民組織（協同組合・プレ協同組合）の強化活動を継続してほしい旨の説明があり了承はしたものの、今後の活動を考えると呆然とならざるを得なかった。活動の母体となる事務所は閉鎖され、かつパートナーとしての現地普及員も解雇されてしまっているのだ。もう何もなく、誰もいないのである。

とにかく、農村に出かけよう、出かければ何かがある。これを当面の大きな目標に据えた。それには、農村に出かける足を確保することが一番大きな問題だ。翌日から総合モデル農村計画のプロジェクト事務所、あるいは農地改革省（以下INA）の事務所へ日参し、村へ出かける普及員をつかまえて車に同乗させてもらうことにした。

主に行動を共にしたのは、INAの普及員であった。所属先も違い彼らの仕事にも関係のない、ちょっとスペイン語が話せる風変わりな日本人を、彼らは快く同乗させてくれ、村へ連れて行ってくれるようになった。彼らの説明を受け、あるいは活動を通してスペイン語やホンデュラスの農業、農業行政、農民の生活を学ぶことができたのも幸運だった。村を巡回し始めて半年くらいたったころには、私にも農村の概略が分かるようになったし、同じ村へ何回となく行き、農民とも自然に顔馴染みになっていった。

しかし、所属先が異なり活動対象地区の広い普及員と一緒に農村への巡回指導を行っていては、私の活動に限界が見えてくるのは当然のことだった。残る任期が一年あまりになったころ、私は彼らと行動を別にすることにし、独自の活動を計画した。私自身で掲げたタイトル「村落調査を通した協力活動」の実践だ。調査を通して浮かび上がってくる村（グループ）の問題点を改善していくーというのが計画の主旨である。

調査・協力対象として選定した村は、チョルテカ市のピエドラパラダ。アセンタミエント・セイス・デ・セプティエンブレというグループが単独で形成している村だ。入村したばかりの新しいグループだが、入植時に26名いた組合員は12名に減り、食料援助をあおぐ最貧グループに属していた。

組合長の協力を取り付けることができ、翌日から村へ通う毎日が始まった。訪村の足として自転車も購入した。農民と共に畑で働き、農作業の後は彼らと語らい、あるいは子供達と遊ぶ日々。私を理解してもらうこと、彼らを理解することに努めた。

この村では、主食のトウモロコシでさえ100%自給できずにいた。そこで、最初に着手したのがトウモロコシの耕作指導でる。ホンデュラスの農民一般にいえることだが、農業知識に乏しく、特に栽培密度に対する知識・認識がほとんどない。栽培密度に関する講習会を重点的に実施し、耕作地でも継続的な指導を行った。

次に手がけたのはマンゴーの植樹だ。この村は歴史が浅いこともあるが、ホンデュラスで広く栽培されているマンゴーの木が一本もなかった。牧草、トウモロコシ、ゴマの栽培のみに頼っていては、いつまでも最貧農民層にとどまらざるを得ない。将来に向けての改善の手始めに、自家消費と余剰品の販売を目的として、マンゴー（40本）の植樹を農民と共に実施した。

農業面以外の問題点としては、グループ全員が同一地域に住んでいる割には融和に欠けているように感じられる点があった、ホンデュラス特有の農業生産組織「グループ・カンペシーノ」で共同作業を行っていくには、グループの融和は不可欠かつ最重要要

因なのである。

そこで、共有のものを持つことにより融和向上につなげようと、村人と共にサッカー場の整備に取りかかった。サッカーはホンデュラスの国民的スポーツで、たいていの村がサッカー場をもっているのである。また、サッカー場の造成と同様、グループ内のコミュニケーション不足、融和不足の解消を考え、会議室・図書館といった共通滞留空間をつくることも計画した。

以上のように、私の終盤の協力活動は村の生活環境の改善を目的とし、グループ内の融和向上に力を注いだ。

（了）

青西靖夫 Yasuo Aonishi

派遣国：ホンデュラス
職　種：村落開発普及員
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：千葉県

初　出：「日本農業新聞」1990.6.17（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じ物を食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回は、その一つ、中米のホンジュラスで、土壌保全技術の研究・普及に活躍している隊員のレポートを紹介する。

*　　*　　*

【青西靖夫隊員の報告】

私の所属はホンジュラス電力公社のダム流域管理部で、担当はラ・ユニオン村を中心とするエル・ニスペロ・ダム流域の急斜面地帯。

業務の中心は、トウモロコシなどの作物や、表土流失など問題の多いこの地区での土壌保全について調査し、適性技術を考案 普及することである。到着して間もなく雨季が始まったため、この間を利用して地域の農業の観察と、この国の土壌保全技術の研究にとりかかった。

ほとんど無肥で連作するのだから、土壌保全だけでは収量も増えず、農民の積極的な参加も望めない。土壌保全とともに、高価な化学肥料に手の届かない農民にも可能な施肥技術を導入しなくてはならない。そこで、輪作としての緑肥栽培とコーヒーによる土壌保全などで、これらに対応しようと考えている。

前途に問題は山積しているが、残された任期を悔いないものとするため全力を尽くしたいと思っている。

（了）

木伏克実 Katsumi Kifushi

派遣国：ホンジュラス
職　種：村落開発普及員
隊　次：昭和63年度2次隊（活動期間1989年1月～1991年1月）
出身地：千葉県
初　出：「日本農業新聞」1990.12.16（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊は、自らの利益を求めることなく、アジア、アフリカ、中近東、中南米などの開発途上国の人々のために自分の持っている技術を普及させる目的で各国に派遣されている。

そこで今回はホンジュラスで現地の人々と一緒になって活躍している隊員のレポートを紹介する。

*　　*　　*

【木伏克実隊員の報告】

当初私は、村落開発普及員としてホンジュラスで活動するはずであったが、現地での強い要望もあって非伝統農産物輸出協会に配属された。この部署は、メロン、綿花、サトウキビ、ゴマ、カシューナッツの五種類の作物の技術指導、融資などを行っている。ここでは、日本と違って普及員のプライドが高いので、除草などのこまかい作業はしない。当初はそんな習慣にとまどったが徐々に慣れてきた。

作物ではカシューナッツが特に将来性があると思われる。種子からはナッツとうるし塗料。果実はビタミンCを多く含み、ジュース、ワイン、ジャムなどに加工できる。また、成長が速く、3年目から収穫でき、7年間で成樹してから15～20年間は収穫が可能だ。

さらに、焼畑により緑が減少することを考えれば、この植樹によって緑を守るといった目的もある。長期的に生産性があり、最終的には薪材にも利用できるカシューナッツの普及は、任期中に是非とも成功させたいと思っている。

（了）

石崎程之 Noriyuki Ishizaki

派遣国：ソロモン諸島
職　種：村落開発普及員
隊　次：平成2年度1次隊（活動期間1990年7月～1992年9月）
出身地：愛媛県
初　出：「農機新聞」1994 8.23／8.30（2回連載）（（株）新農林社）

ソロモンに必要な技術

<1回目>

南太平洋に浮かぶソロモン諸島の首都ホラニアのあるガダルカナル島は太平洋戦争の激戦地として有名。アメリカ軍が上陸してから50年がたっている。いまもこの島には回収されないまま多くの遺骨が眠っている。日本人にとっては忘れられない土地だ。いまではここで青年海外協力員の多くの隊員たちが国際協力で活躍している。新しい日本人の姿がある。その隊員のリポートを紹介する。

*　　*　　*

人の米を食う人々

ソロモン諸島（オーストラリアの北東の南太平洋に位置する島国）では約80%の人々が自給自足の生活をしており、貨幣経済が普及しているのは首都のホラニアと州都周辺のごく限られた場所だけである。そのためGNP（国民総生産）GDP（国内総生産）は数字で見れば少ないが、ソロモン人達は他の途上国と比べて豊かな生活をしている様に感じられる。その理由として、まず第一に栄養失調で死ぬ人がいないこと、そして第二に犯罪が少なく治安が良いことが挙げられる。

ここで、ソロモンを語るうえで不可欠な、ソロモン人の行動の根本になっている伝統的社会制度についての具体的な例を私の日記から引用してみたいと思う。この日記は、ソロモン人や白人と同居を始めた最初の日のものである。

〔同居人の3人のソロモン人は比較的親切で、私が一人でメシの準備をしていると、『メシはたくさん炊いてあるから食べてくれ。ヌードルもたくさんあるし…』と言ってくれた。なるほどメシはたくさん炊いてある。しかし、それが私の持ってきた米を使ったのだとわかった時には、狐に化かされたようだった。おくびれもなく食べてくれと勧めてきた三人に対しては、怒るというよりも呆れて、おかしくて、まあこんなもんだわいと思いながら、ヌードルと石のように固い芯のあるメシを遠慮なく（自分の米だから遠慮する必要もない）食べた。腹が減っていたので結構食えた。）

これは、ソロモンの伝統的社会制度であるワントーク（同じ部族の仲間達のこと）システムを理解すれば納得できる。これは、一言で言えばお互いを助け合うシステムであり、ワントークに金持ちがいれば、その人に養ってもらえる。ラジカセにしても米にしても個人の所有物という考えはなく、共同で所有しているという感がある。このシステムは、自分で稼がなくても食わせてもらえるので仕事をする意欲に欠けるという欠点はあるが、貧富の格差を生み出さないという長所も同時に持ち合わせている。

ソロモンの将来を見る

私の配属先は、主に生活の改善と啓蒙活動に取り組んでいる組織「ソロモン開発トラスト」であった。私の要請背景が「栄養改善のための野菜作りの指導」であったため、ソロモン人はあまり野菜をとらないのであろうと思っていた。しかし、実際現地の人々は野菜を多くとっているし、食用としている野山に生えている野草のほうが、ビタミン類などを多く含んでおり栄養価が高い。

しかし、この国の農業は次のような問題を抱えている。まず第一に人口増加率が非常に高く、将来において食料不足になる可能性が大きいこと。第二に、人々の嗜好が経済発展や貨幣経済の浸透によって変化してきていること。これは、米の輸入が1982年～1988年で4倍に増えたこと、ホラニアなど都市部を中心に米需要が増大していることからも判断できる。

このような背景から、人口は増えても栄養が悪化しないように食料を増産できる技術と、経済が発展し人々の食の嗜好が変わった時に、それを生産できる技術が今後のソロモンにとって必要になるであろう。

<2回目>

「何もしない」指導

先週に引続きJICA(国際協力事業団）村落開発普及員の石塚程之氏による、ソロモンでの農業状況についての報告を紹介する。

失敗、失敗、また失敗

写真は、私が任期後半に取り組み荒れ地から開墾したものであるが、任期の最初からこの様な畑を完成させていたわけではない。任期の前半は散々なものであった。それは、野菜作りとその普及に対する認識が甘かったからに他ならない。具体的には次の3点が挙げられる。

①野菜には季節性があり、ものによってベストシーズンは年1回しかない。

②種を蒔けば次の日に収穫できるという性質のものではなく、土作りまで含めると長時間を要する。

③収穫までを一貫して教えないと、現地の人達の意欲を引き出すことはできない。

しかし、赴任当初は私も変に気負っていたし、自分の技術にも自信がなかったので、①に失敗するとその年は何の成果も出せないのでは‥と不安に駆られ、②で取り戻そうとすればするほど、焦って、土作りなどの地道な作業を省いてまた失敗し、③を実現させようと様々な場所で講習会を行ったが、結局どの講習会も、失敗に終わった。

そこで私は次のような作戦を立て実行した。一貫性を持たせながら様々な場所の人達の指導にあたるということで、宿泊施設と研修所を備えたデモンストレーションファームを建設した（毎日通え、目の届く範囲であること。水の便、マーケットへの距離、土の肥沃度などできるだけ好条件の場所）。また、意欲を引き出すという点では、短期間に収穫できるものを大規模に派手に行い、収穫の喜びを身をもって体験させる　このような作戦が功を奏し写真の様な畑が出来上がった。

嫌われ役功を奏す

ソロモンの人達と接している時によく感じたことは、白人や私たち日本人に対してコンプレックスを持っており、自信を失っていることであった。それは次の言葉に代表されよう。「白人や日本人にはできるかもしれないが俺たちにはできない」。私達先進国の人間にとってはこの言葉は都合がいいのかもしれない。だが、同じ人間としてみれば非常に悲しいことだ。

私自信、任期の前半部分は失敗を繰り返し、ボロボロになり、コンプレックスを持ち、自信を失っていた。毎日ビクビクしていた。コンプレックスを持ち続けることが、その人にとって辛く、悲しく、そしてどんなにマイナスになるか良く知っていた。だからこそ彼らには自分自身で克服してほしかったし、人間なんてやる気さえあれば何でもできるということを認識してほしかった。

私が後半に元気になってからの指導方法は何もしないことだった。農場の横に教室を建てた時も、ほとんど何もしなかった。彼らのやり方を見て失敗するだろうと予測できる時にも、彼らに任せっきりであった。

案の定、失敗して彼らは私に不平を言ってきた。だが、どうにか教室が完成し、これから宿舎の建設に取り掛かろうという段になり「今度も任せてくれ。俺達だけでやってみせる。今度はもっと早く作れるようになるさ！」という彼らの言葉を聞いた時「仕事は終わった」と感じた。

この様に、最後は順調に活動を終えられたのも、私がもがき苦しんでいたときに支えてくれた人々のおかげである。悩み多き時に「メシでも喰いに来んか！」と誘ってくれた先輩隊員の方々。温かく見守ってくれた配属先のボス。不平不満を聞いてくれた協力隊の調整員、その他、数えきれない人達　本当にみんなに支えられ歩んできた2年間であった。それと同時に結局大切なのは物ではなく、人だということがわかった2年間でもあった。

大学を休学して参加した未熟な私に、様々な体験をさせてくれた協力隊に感謝したい。そして、私に多くのことを教えてくれた人々の存在に感謝したい。協力隊がなければ今の私はなかったのでは、と帰国してしばらく経った今よく感じている。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

食品加工・農産物加工・水産物加工

〈食品加工〉年度別・国別派遣実績

国　名	89年度まで	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	99年度	総　計
中国	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3
マレイシア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3
モルディヴ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
モンゴル	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
ネパール	9	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	11
フィリピン	8	2	2	0	0	1	0	0	1	1	0	15
タイ	1	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	5
〈アジア地域〉	21	3	3	2	1	2	1	3	1	3	0	40
スーダン	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
シリア	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
イエメン	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
〈中近東地域〉	4	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	7
ボツワナ	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
エティオピア	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ケニア	8	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	11
レソト	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
タンザニア	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
〈アフリカ地域〉	12	0	1	1	0	2	1	1	0	0	0	18
ボリヴィア	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	4
コロンビア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ホンデュラス	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
パナマ	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
ペルー	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈中南米地域〉	10	1	2	0	0	1	0	0	1	1	0	16
パプア・ニューギニア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈オセアニア地域〉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合　計	48	5	6	4	2	5	2	4	2	4	0	82

〈農産物加工〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
インド	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
マレイシア	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ネパール	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	3
フィリピン	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
タイ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
〈アジア地域〉	5	1	2	0	1	0	1	1	0	1	0	12
ルワンダ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
タンザニア	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
〈アフリカ地域〉	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
ボリヴィア	3	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	6
コロンビア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
コスタ・リカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
エル・サルヴァドル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
グァテマラ	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	3
ホンデュラス	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
ジャマイカ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
パナマ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	3
〈中南米地域〉	11	0	2	1	2	0	2	1	0	3	1	23
合　計	23	1	4	1	3	0	3	2	0	4	1	42

〈水産物加工〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
マレイシア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
フィリピン	8	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	10
スリ・ランカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈アジア地域〉	11	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	13
エティオピア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ケニア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
セネガル	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
ザンビア	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
〈アフリカ地域〉	10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	11
コロンビア	1	1	1	1	0	0	1	0	1	0	1	7
コスタ・リカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
ホンデュラス	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
パナマ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2
〈中南米地域〉	6	1	1	1	1	0	1	0	1	0	3	15
パプア・ニューギニア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
サモア	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
〈オセアニア地域〉	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
合　計	31	3	1	1	2	0	1	1	1	0	3	44

大淵喜隆 Yoshitaka Ofuchi

派遣国：ホンデュラス
職　種：食品加工
隊　次：昭和59年度2次隊(活動期間1984年11月～1987年12月)
出身地：東京都
初　出：「水産世界」1988.12.31（(有)農林水産研究所）

リード
冷凍方法を指導

ホンデュラス共和国は中央アメリカに位置し、エルサルバドル、ニカラグア、グァテマラ3国、および北はカリブ海、南は太平洋に囲まれた国である。漁業形態は、$1米国の資本、技術力によるエビトロール会社にて行われいる近代漁業、$2沿岸漁民による小規模零細漁業および漁業協同組合設立による組合漁業一の2つに大別される。

前者は、戦後カリブ海のエビ資源に着目した米国資本により、ロアタン諸島を中心に100トンクラスのアウトリガートロール船、保存設備、包装工場などの援助がなされ、発展してきた。現在、それらの施設はホンデュラスに払い下げられているが、今なお輸出先は米国であり、実際の会社運営も米国人経営者の手に委ねられている。

後者は、戦前戦後を通じて大きな変化はなかったが、1974年～78年の国家5カ年計画に基づく需要プロジェクトの1つになったことから、この10年で少しずつ変わりつつある。このプロジェクトは沿岸零細魚家の育成、水産資源の調査と有効利用を主目的としたもので、社会的にも、人口増加に伴う代替タンパク源としての魚肉の利用、失業率が高まる中での漁業への雇用促進、都市部への人口流出の抑制といった期待がかけられていた。そして、こうした零細漁民、特に漁業協同組合を対象に、我々漁業関係隊員の協力活動が続けられてきた。

この10年間で、漁民やそれを取り巻く環境にも変化が生じた。手漕ぎで漁に出ていた漁民が船外機を使うようになり、綿製の網はナイロンに。トルヒーヨ、オモア、コヨリートの各漁協連合会には、19トンクラスの漁船、冷凍設備なども導入された。社会環境も、バスが通っていなかった村に定期バスが運行するようになり、電気が通り、テレビが見られるようになった。しかし、以前から変わらぬ問題もある。漁獲量が少ないこと、魚肉の価値が畜肉に比べて高いこと、そして魚を食べる習慣があまりないことだ。

赴任中の2年間、私は前述の3魚協連合会で冷凍方法を指導し、モスキティア地区では塩干魚を主とした加工品の指導と普及に努めた。そしてお金の管理、収支計算の仕方を漁民と一緒に考え、また、作ったものが売れなければ意味がないから、首都テグシガルパ市で市場調査も行った。

鮮魚販売を計画

次にモキティアについて述べることにしよう。ホンデュラス北東部、カリブ海沿岸およびニカラグア国境地帯に広がる広大なジャングルと湿原地帯をモキティアと呼ぶ。電気、水道はなく、同国で最も開発の遅れている地域だ。他地域からの交通手段は飛行機しかなく、ここではセスナ機、カヌー、馬が重要な交通手段である。

一方、ここは豊かな森林資源と漁業資源、農業資源に恵まれており、経済企画庁、森林公社、天然資源省などからなる開発計画委員会が発足していた。漁業は11月～4月の塩干魚作りが中心で、それ以後は漁業から離れてわずかに持っている土地で農業を営むかエビ漁に出るかであった。

こうした漁業不振の原因は、ここが非電化地域であること、交通網の不備により市場がないことに起因する。そこで考案されたのが、1年を通じての鮮魚販売計画であった。これは、プエルト・レンピーラ漁協に小型発電機と小型冷凍庫を設置し、周辺漁民から鮮魚を購入。それを市内に流通させようという計画である。また、国連機関を通じてモコロン地区へも販売する予定であった。

1985年5月、いよいよ発電機と冷凍庫、魚肉加工用機材を運ぶことになった。漁協はある程度組織化されており、漁民の期待も大きい。早々に組合関係者、現地連絡員を含めて、作業方法と機材の操作方法を指導し、加工に関する一般的な解説、魚肉団子のデモンストレーションを実施した。

冷蔵庫が壊れ悪戦苦闘する

ところが1カ月後に現地連絡員から届いた連絡は、冷凍庫を壊したというものであった。同時に、魚も腐らせてしまったという。これでは彼らのやる気も失せてしまう。早速モスキティアに飛び冷凍庫を見たが、現地では修復不可能だ。さらに悪いことには、漁協が借りていた事務所と作業場が、資金不足のため借りられなくなったというのである。新たに土地

を確保し、そこに自前の建物を建てなければ冷凍庫修理しても雨ざらしになり、また壊れてしまう。計画は大幅に遅れた。

その後、私はこのモキティアに長期間入ることになったが、現地で待っていたものは「船のエンジンの調子が悪いので出漁していない」「冷凍庫がないので何も作っていない」「発電機も壊れた」という訴えと言い訳であった。だが、ここで生活するうちに私も気付いたのである。ここには何もない。だから私は、「何かを運び込み、それが揃ったうえで何かを始めよう」と考えていた。しかしこの発想は、「冷凍庫がないから何も作らない」という漁民の発想と同じではないか！　確かに何もないが、何もない中で何かを作るのが我々の仕事だろう。すべてを揃え、日本と同じことを教えていても、実情にあったものでなければ意味がない。さらに、中途半端に機材を入れ、適当なプロジェクトを示し、それがしり切れトンボになってしまってから「あとは知りません」「自分の専門外だからわかりません」では、責任も信用もあったものではない。

何かを始めるなら、必要な情報をあらかじめ調査し、いろいろなケースに対応できるだけの下地を作っておくべきだ。現状把握の甘さが計画を遅らせる原因となる。この鮮魚販売計画がそのいい例だ。このモスキティア鮮魚販売計画は、結果的には機材だけ導入し、その保守管理方法や有効な利用方法などについては、残念ながら十分教えられなかったと言わざるを得ない。

漁民との関係も、すべてがうまくいったというわけではない。彼らが我々に求めているものと我々が技術協力しようとしているもの、あるいは移転という形で与えようとしているものの間にはギャップがあり、矛盾点もあった。果たして我々の行ってきた活動が、本当に漁民に還元されているのだろうか。そんな疑問を感じる時もあった。

私にとってホンデュラスでの活動は、教えることより教えられるほうが多かったような気もする。あっという間の2年間だった。

（了）

梅澤みき Miki Umezawa

派遣国:マレイシア
職　種:農産物加工
隊　次:平成元年度1次隊(活動期間1989年7月～1991年7月)
出身地:神奈川県

初　出:「農村報知新聞」1991.10 28 ((株)農村報知新聞社)

朝7時10分· 目覚まし時計の鳴り響く予定の5分前。いつものように目が覚めた。窓を開けると霧の向こうにゴムのエステートがぼんやりと見える。"さあ、今日も1日が始まるぞ" と思う。

私の名前は梅澤みき。1989年7月に、青年海外協力隊·平成元年度第1次隊員の1人として、ここマレーシアに赴任した。マレーシアは、タイやインドネシアに隣接するイスラム教国である。私の協力させてもらっている職種は「農産物加工」。一口に「農産物加工」と言っても、これはこれでなかなか分野が広い。

マレーシアにおいて私が所属している連邦土地総合整備公団は、全マレーシア中に現在186カ所の入植地を持つ。私の活動している入植地もその中のひとつである。主産品はゴム。朝、まだ霧の濃い中、ゴム採り作業が進められて行く。現在、オイルパームヤシのプロジェクトも進行中であり、将来ゴムとの2本経営でやっていこうというものだ。

現在、公団側職員25名、入植者数78名。その家族も合わせるとざっと600名。これで生計を立てて行くのだ。当然のことながらプロジェクトが軌道に乗るまでの数年間はとても経済的に苦しい生活となる。このような背景の下、生計を助けるためのプロジェクトとして入植者の間から生まれたもののひとつに醤油工場があった。私は、この醤油工場における加工のアドバイザーとして、協力活動を展開中なのである。

私がいる醤油工場の労働者は男性2名、女性5名の計7名である。まず、初めて麹を見せてもらったときの話をしよう。マレーシアでも麹のことを「koji」と言う。麹室に入ると、大豆から灰色の菌糸が伸びていて、黒っぽい胞子がいっぱいついている。触ってみるとベトベトしている。マレーシアの麹についてほとんど知識がなかった私にも、いっぺんで雑菌汚染であることがわかった。ひとりが種麹を持って来て見せてくれた。きれいなうす緑色をしていた。「これを使用して製麹したの?」という問いに「もちろん」との答え。彼らには本来の麹の姿がわかっていなかったのである。

ということで、私の協力活動は「麹作り」からスタートした。すでに1年以上も雑菌に浸されていた麹室は、何回サニテーションをしても空しいくらいであった。製麹についても、大豆の皮を極力採ってみたり (丸大豆を使用しているため)、湿度や温度を変えてみたり、自分の考えられる範囲のことは手当たり次第に試してみた。

じきに雨季がやって来た。こうなると何をどう工夫してもダメである。仕方がないので雨季が終わるまで待つことにし、雨季が明けると同時に「麹作り」への再チャレンジである。再び麹室をサニテーションし、製麹作業に入った。労働者達は、真剣そのものである。翌日、様子を見ると良く登熟していて、これといった異常は見られない。安心する。その翌日、朝、麹室に入った私達は思わず喜びの声を上げた。一面に黄緑色の　が春先の若葉を思わせてくれるように、淡く広がっていたのである。この時以降、雨季の雑菌汚染を除いては深刻な事態には陥っていない。

どういった運命の巡り合わせか、私はこの地で活動させてもらい「農産物加工」という職種でなければ決して体験することの出来なかった仕事や生活をしてきた。"加工アドバイザー" としてこの地に奉仕するのと同様、またはそれ以上にこの地、ここの人々に育てられている私なのである。今日も、イスラム寺院から礼拝を促す声が響いてくる。こういった世界もあるのだなあ、とゴムの木をぬって照りつけてくる暑い夕陽を浴びながら、しみじみと思う。

(了)

栗原優子 Yuko Kurihara

派遣国：マレイシア
職　種：農産物加工
隊　次：平成2年度1次隊（活動期間1990年7月～1992年7月）
出身地：神奈川県
初　出：「農機新聞」1992 9.15（(株)新農林社）

青年海外協力隊として技術協力を目的に、平成2年度一次隊としてマレーシアに派遣された栗原優子さん（職種・農産物加工）の報告レポートを掲載する。

*　　*　　*

私は青年海外協力隊として、技術協力を目的にマレーシアに派遣されました。

マレーシアは赤道に近いため1年中ほとんど季節の変化はなく、気温は26度前後といったところです。

首都クアラルンプールは大都市で生活水準も高く、物やサービスに関しても不自由を感じることはありません。しかし、開拓地などは、電気もなければ水も川か井戸に頼ることになり、伝染病にも注意しなくてはいけません。私の任地でも電気や水は一応整備されているものの、頻繁に止まってしまうので常備しておかなければ慌てることになります。慣れてしまえば別段とりたてて騒ぐ程のものでもないのですが、それでも赴任3か月目頃に2週間もの間、水も電気も止まってしまった時は、さすがにパニックに陥ってしまいました。

即日腐ってしまう

この2年間を、反省をこめて振り返ってみると、私の協力隊活動はお世辞にも効率的なものではなかったように思います。

もともと私に要請された業務内容は、ソースの新工場稼働に伴う品質低下の防止、食品衛生観念の指導というものでした。しかし、「要請された業務以外の事をするのが協力隊」とのジンクス通り、予算の関係上で新工場については4年間見送り、品質向上指導よりもまずは作ったソースを売る店を探すのが先ということで、赴任当初の仕事はソースを営業して商店に卸すということになってしまいました。

当の私はというと、市場獲得方法はおろか販売手法にさえもわからず、戸惑いが隠せませんでした。しかも、作ったソースが即日腐って、地元の商店には卸せないらしいのです。工場では、今までに4回の出荷をし、その内3回の出荷製品が即日腐ってしまったということです。訳を詳しく調べてみると、工場は私が赴任する2カ月前に即席でつくられたそうで、一番大切な衛生面の管理もずさんになっていることが主な原因だと感じました。

とりあえず、製品の加工過程の見直しと改善を図り、問題の無いソースを作らなければなりません。と同時に工場内の温度、掃除、職員の衛生管理等の点も注意していくことにしました。

一方、販売の問題ですが実をいって困ってしまいましたが、訪問販売活動は始まってしまい、職員と手分けしてソース片手に商店をまわることになりました。嫌がる店主に時には強引に、時には上手くのせたりして、ソースを置いてもらえるように頼んでまわりました。なにせ、販売の正攻法を全く知らずの営業なのでいろいろと困ったことなどもありましたが、職員と一緒に精一杯やったおかげで注文も絶えることがないまでになりました。大変な活動でしたが、この事が2年間の協力活動、現地の人々の接し方に大きな影響を与えたと思います。

私は問題提示屋に

私の本来の活動は、「指導」というものより問題を一つ一つあげていく「問屋提示屋」のようでした。まず皆で「問題」を意識して、そのことに対して皆で考え、皆で体験的に学習していく…その結果、一つ一つが改善されていく‥ という関わり合いであったような気がします。例えば、食品の細菌汚染に関して、以前は恐ろしく無防備でした。経験上、「食品はいずれ腐る」とわかってはいるのですが、何故腐るのか、どうしたら防げるのか等を考えない。また、工場内にはかなりのゴキブリやネズミがいるのに、国民性や宗教の違いもあり殺そうとはしません。その上、当初は工場内も土足のままであったし、手を洗うことさえしなかったように思います。これでは腐らないほうがおかしい。

初めの頃は面食らったのと同時に、ややヒステリックに注意ばかりしていました。特に私は、実際に食品工場に勤務したことがなく、大卒ストレート参加組だったので頭は理論のみで、問題点ばかりが目に付いてしまうのでした。しばらくは「いたちごっこ」が続きましたが、根本的な点でこんな指導ではと考えることがあり「問題提示屋」になったというわけです。何に関しても体験的にTRYし、その結果

「本当だ」と思うことが大事なんだと思います。このことは、国が違う人間同士にもいえて、互いに発展していくためにはまず、「なるほど」と納得し合い、互いに認め合うことだと実感しました。

ここマレーシアの生活観、衛生観念は、この国の風土と歴史の上に成り立っています。よってそれに対して頭から「それはダメだ」といっても始まりません。「何故、ダメなのか」「どうしたらいいのか」とまずは体験的に納得してもらうことです。理論的なことは後回しにして、「なるほど」と相手が思えば後は自然と「どうしてなんだろ？」という概念が生まれてくる筈です。

私のこの2年間の活動については、いろいろと考えさせられる事ばかりでしたが、「やはり来て良かった」の一言に尽きます。多くのことを体験し、学べたこの2年間の経験は、きっとこれからの人生に大きな影響を与える事と思います。そういう意味では、貴重な体験であったし「やはり来てよかったな」であると実感します。

（了）

百田龍治 Ryuji Momota

派遣国：ボリヴィア
職　種：農産物加工
隊　次：昭和62年度2次隊(活動期間1987年12月～1989年12月)
出身地：福岡県
初　出：「日本農業新聞」 1990.2.25 (全国新聞情報農業協同組合(連))

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回は、その一つ、ボリビアでジャム作りを通して、地域おこしに貢献した隊員のリポートを紹介する。

*　　*　　*

【百田龍治隊員の報告】

青年海外協力隊員としてボリビアに渡った私は、アンデス山脈に囲まれた果物の産地のユンガス地方に赴任。配属先はボリビア国立農業技術研究所である。

同地方は前任隊員の努力によりフロリダという農業協同組合が結成され、手作りのジャムが生産されているが、問題はまだ多い。容器一つをとってみても、容器代がジャムよりも高いものについてしまうのである。電気がないこと、交通手段がないことも苦労させられた。また、農協を組織しているのがすべて純粋な農民たちということもあり、詐欺にも何度かあったり、ペルーからの密輸ジャムにも泣かせられた。

この地で1年半活動し、曲がりなりにも技術だけは確立されと思う。また、配属先のカウンターパートが大分県の農業技術研修センターで研修を受けており、彼が戻ってくれば、引き続き農民を指導してくれるだろう。

(了)

石田光洋 Mitsuhiro Ishida

派遣国：コロンビア
職　種：水産物加工
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年3月～1993年3月）
出身地：千葉県

初　出：「水産世界」1993.8.5（(有)農林水産研究所）

道なき、太平洋ジャングル地帯

首都ボゴタより50人乗りの飛行機で1時間半、さらに20人用に乗り換えて40分、小さな漁村が見えた。パナマの南、約400kmにも及ぶコロンビアの未開発の太平洋岸線の1点である。そこは、点が意味するように小さな村バイヤ ソラノ。けれど、昨年はマーリン釣り世界大会も開催された自然の宝庫である。しかし賑やかなのはその時だけで、漁民たちはカヌーやボートで漁をし、その日、その日を暮らしながら太平洋に沈む太陽を見送っている。

気候は厳しく毎日が梅雨のようだ。気温は+30度、とにかく蒸し暑い土地である。しかし雄大な自然は大変美しく、ジャングルも海も、実に多くの動物や魚たちを私に見せてくれた。

孤立された大漁の村

さて、この国の海産物事情であるが、何せ暑い場所なので、せっかく釣った魚もすぐに鮮度が落ちてしまう。これだけ雨が降ると干物もできにくいし、この国は干物を食べる習慣もない。せめて、氷があれば日持ちがするのだが・。と思っていたところ、政府の計画で冷蔵庫が建設され、それが我々にとって唯一の救いとなった。庫内の温度はプラス10度からマイナス12度を上下してはいたものの、それでも1週間程度は保存可能だ。

しかしそれ以上に困ったのは、この村は交通事情が悪いため、せっかく漁をした海産物を商業圏へ輸送できない事である。ここバイア・ソラノから内陸へ続く道はない。海路では運搬船と、それを動かすエンジンとガソリンが必要で、そのうえ近くの商業港まで1日半はかかる。

では空路ではどうか？例えば3トンのプロペラ機をチャーターすると30万ペソかかる。つまり1キロ400から600ペソで、内陸小売店での売価が2,700ペソだから充分に採算が取れる。

しかしながら、タイ、クエ、カンパチなどの商業ベースの白身魚は高価で売れるが、カツオ、マグロ、サメなどの赤身や商業ベースに乗っていない漁獲物は、空輸では商品価値が低すぎる。漁民が浜へ上げる魚は、赤身が殆どであるし、その中から白身魚だけを選別し、3トン集めたところで空輸するのは有効な方法とは言えない。

現地での未知の食品試食会

それならば、海産物に付加価値を付けてみてはどうだろうか。そこで試作したのが、ハム、ソーセージ、揚げ蒲鉾などの水産加工品であった。

まず、味付けに苦労した。基本的に甘みと塩は混ぜないこと、熱薫でも冷薫でも塩を主体にし、他の加工品では砂糖を隠し味程度にした。また、塩は少し多めに入れるくらいが定評であった。

さらに、魚の匂いがしないことは必要条件であり、現地の香辛料を駆使して畜産肉に近い味付けをしたのがよかった。

次に、これらを口に入れさせるための形に工夫をこらした。とにかく今までに見たこともなく、食べたことのない食品は口にしたがらないし、買ってもくれないのである。

それならばと、揚蒲鉾をエンパナーダ（とうもろこしの粉を原料にした揚げギョウザのような食品）の形にしてみたり、彼らが普段に食する馴染みのものに類似させてみた。

そこで、さらに頭を捻り、パイナップルをくるんでエンパナーダ・デ・ベスカードコン・ピニャ（魚のエンパーナーダ・パイナップル包み）を作ったところ、非常に一般受けをした。

我々の魚肉ハンバーグを見よ!

さて、これで何とか安価な魚に付加価値をつける目安がついたのだが、協力隊員が一生製造を続ける訳にもゆかない。しかし、今の状態では漁民にそれを任せることもできない。そこで一般の主婦のグループ、Las Atuneras（マグロたち、黒人の太ったおばさんをイメージ）を結成した。ここでの問題は、彼女たちだけでそれらを容易に製造できるのか？品質は？衛生面は？など、考え始めればきりがない。

そこで我々の選んだ加工品は魚肉ハンバーグであった。製造工程は採肉、水晒し、ひき肉、調味、成型、蒸煮、冷凍、包装、の順である。これなら現

地のどんな原料でも簡易的に製造できるし、保存は我々の冷蔵庫でも日持ちが良い。さらに輸送でも品質を損ないにくいし、食前に解凍して必ず加熱処理するので衛生的で安全であり、調理方法も揚げるだけである。

その後、おばさんのグループは村でハンバーグを売り、また飛行機でチョコ県都ギブドへ行き、試験販売の出店を開き、経験を重ねながら結構な収入も得た。そのうち、スーパー、レストランから注文が来るまでの好評を得るようになった。

しかし、ここまで進んでいながら、重宝していた我々のコロンビア政府による冷蔵庫は、調理販売における必要な衛生基準を満たしていなかったのである。つまり加工品だろうが鮮魚だろうが法の下では販売不可能になったのだ。

そこで、営業許可証取得のために改築を進めることになったのだが、ここはバイヤ、ソラノ、ジャングルの中の道のない村である。頼んだ8トンのセメントもどこへやら？そのうちに私の任期も終了し、今はただ、彼女たちが本当のやる気と努力を持ち、今までの経験を無駄にしないことを願うだけである。

（現在コロンビアには新隊員は派遣されていない）

ところで、このハンバーグ販売で消費者からこんな声が聞こえてきた。

「おいしい、本当に魚でできているの？」

「そう、中にはパン粉、ニンニク、粉ミルクバター、タマネギがふんだんに入っているのよ、鮮度の高い魚を使って入るので臭くないでしょ、魚は生きている時は臭くないものですよ。」

「でも、どこで作ったの？」

「バイア、ソラノよ。」

「えっ！　あそこは何もないでしょ！　どうしてあそこでこんなものができるの？　道もないじゃない。」

「でも、私たちがいるでしょ！　全て自然のお恵みよ」

と答えたおばさんたちグループの目の輝きは自信に満ちたものだった。その光景はジャングル、澄んだ空気、美しい海、そして彼女たちがそこに存在して生活していることを、新たに認識するのに充分だった。

コロンビアでも忘れられた県とよばれるチョコ県、その中で最も未開発なバイヤ、ソラノ村での生活は、自然、人々と触れ合い生活していく中で、私にも、何か自信というものを教えてくれた…、そんな気がする。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

森林経営・植林

〈森林経営〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
バングラデシュ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ブータン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
中国	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
インドネシア	0	0	2	0	0	0	1	0	0	1	0	4
ラオス	0	0	0	0	1	2	1	0	0	1	1	6
マレイシア	8	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	9
ネパール	10	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	13
フィリピン	9	0	0	0	0	1	2	0	1	0	0	13
スリ・ランカ	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
〈アジア地域〉	31	2	4	0	2	4	4	0	1	3	1	52
エティオピア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ケニア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
マラウイ	10	0	0	2	0	1	0	1	0	1	0	15
タンザニア	7	1	3	2	1	3	0	3	0	1	0	21
ザンビア	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
〈アフリカ地域〉	20	1	3	4	1	4	1	5	0	2	0	41
ボリヴィア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
コロンビア	3	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	5
コスタ・リカ	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ドミニカ共和国	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ホンデュラス	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
メキシコ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	4
パラグァイ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
〈中南米地域〉	11	0	2	1	0	0	0	4	0	2	0	20
パプア・ニューギニア	3	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	7
トンガ	2	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	6
〈オセアニア地域〉	5	1	1	2	1	0	1	1	0	1	0	13
合計	67	4	10	7	4	8	6	10	1	8	1	126

〈植林〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
中国	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3
モンゴル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ネパール	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
フィリピン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
タイ	0	0	0	0	0	2	2	1	3	0	0	8
〈アジア地域〉	3	0	0	0	0	2	3	2	3	2	1	16
エティオピア	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	0	6
ガーナ	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
ニジェール	1	1	2	2	1	0	3	1	0	3	0	14
セネガル	3	1	1	1	1	0	2	0	0	2	0	11
ザンビア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
〈アフリカ地域〉	4	2	3	4	2	0	7	3	1	8	0	34
ボリヴィア	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	3
チリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
コロンビア	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3
ドミニカ共和国	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0	2	7
グァテマラ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ホンデュラス	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
メキシコ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3
ニカラグァ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2
パナマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
パラグァイ	1	0	2	0	1	1	1	0	1	4	0	11
〈中南米地域〉	3	1	3	3	2	5	2	2	3	5	5	34
合計	10	3	6	7	4	7	12	7	7	15	6	84

野々部誠 Makoto Nonobe

派遣国：スリ・ランカ
職　種：森林経営
隊　次：昭和61年度2次隊（1986年12月～1989年5月）
出身地：愛知県
初　出：「東洋医学」1992.8.1（（株）緑書房）

スリランカの森林経営

インド洋に浮かぶ宝石「スリランカ」。インドより海を隔てて約50km、古来より何かにつけてインドの影響を受け続けて来た。私が配属された所は、スリランカ伝統医学省という所である。ここではスリランカの伝統医学（漢方医療）について種々な仕事を行っている。

さて、"アユルヴェダ"という言葉は日本人にとって馴染みのない言葉であるが、漢方医学と言い換えれば理解できるのでは、と思う。「生薬」による治療を主体とした伝統医学である。インドの影響もうけているが、紀元前3000年頃より、スリランカ独自の医療があったそうで、インドの医療との融合により、現在の形になったのが、約2600年前といわれている。現在はスリランカ医療の60%を占め、毎年約260種、4000インド、ネパール等、諸外国からの輸入に頼っている。それゆえ、国内経済を圧迫する一因にあげられる。この状況を打開するため、WHO-VNDPS伝統医学省の合同プロジェクトが開始されることになったのである。

私の任務としては

1 薬用樹種を諸外国より導入し、育成が可能かどうかを調査し、育成する。
2 地方農家、低所得者層、農耕不適土地所有者等に対し、当苗園にて育成した苗を配布し栽培、植栽を指導する。
3 薬用樹の展示林、生薬原料として売却。当農場を60エーカーまでに拡大すると同時に、林業地としての性格をもたせる。

この3点が大きな目的である。しかし、このプロジェクトが開始されて以来、まだ手探りをしながら進めているのが現状で当農場は実験地であるにもかかわらず、専門家が一人しかいない。試験場ならば、各々の分野に専門家を置く必要がありそうだ。まだ我々の計画の1つとして、つい先ごろより気象観測が開始されることになった。開始以来3カ月間、興味深いデータを示している。

平均気温は28℃を越えず、最高気温も30℃に達していない。雨量は160mm／1日という記録的な量を含め、3月300　、4月200　、5月80　と観測値が現れて来た。湿度は平均70～80%特に湿度が高く、これなどは、体感気温などからして、もっと少ないと思っていたので以外である。今後さらにデータが集積されることにより、最適品種、不適品種等が判明し、より良い実験ができることと思う。

しかし時には、いろいろな問題が起こったりする。ある時、インドから輸入した種子をまき育ててみた。半年後、立派に育ったその植物。しかしどうもおかしい。誰も見たことがない。種子につけられていた名前とは違う植物らしい。結局それは薬として使われている植物と近い種類ではあるが、薬用としての価値には疑問の残る物であることが判明した。また、近くの療法士から、「これは、薬草ではない。雑草だ。」と、どなりこまれた。

アユルヴェダは、長い歴史を誇っているが伝統等で受け継がれており、学術的には体系づけられていないため、1つの名前の下に4～5種の植物が利用されていたりする。また先祖代々の秘薬としてつたえられているので、使用植物や製造方法が門外不出となっており、本当に重要な植物の名前がわからず、栽培されなかったりしてしまう。

スリランカにおける薬用植物の分類・栽培等学術的研究は、始まったばかりである。その一翼を担っているのが当プロジェクトである。まだまだ植物学的試験、調査を行えるほど充実した試験農場ではないが、少しずつ確実に進歩しているのが、この一年余りの間でも実感できた。残された任期はあとわずかだが、頑張ってみようと思っている。

（了）

坂井勇夫 Isao Sakai

派遣国：マラウイ
職　種：森林経営
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1989年7月）
出身地：東京都
初　出：「農村報知新聞」1992.4.18（（株）農村報知新聞社）

私は1986年12月より1989年7月まで、青年海外協力隊員として、マラウィ共和国に派遣され、森林経営隊員として活動してきました。今回機会があり、私の協力活動についてお話することになりました。

まず最初に、私が2年半過ごした、マラウィ共和国の位置を、皆さんに説明しなければならないでしょう。マラウィはアフリカ大陸の南部に位置し、タンザニア・モザンビーク、そしてザンビアの3国に囲まれた内陸国です。

まず、その国土は南北に細長く、面積は日本の約3分の1、陽気で人なつっこい7百万人の人たちが暮らしています。地形は概してなだらかで、雨量も比較的豊富なため、農業が盛んで暮らし易く、アフリカ諸国の中では人口密度の高い国の1つです。しかしその反面、この人口の高密度、高増加率のために、土地利用への圧力は年々増加しており、森林は、特に人口密度の高い中、南部地方を中心に減少しています。また、林地が偏在していることも手伝って、都市部を中心として、薪の不足がやや深刻です。

ところで、仕事の内容については、上司から赴任当初に指示があったのですが、現地での実情を見て、私なりに判断・選択・付加し、結局任期中に次のような仕事をすることになりました。①ムランジェシーダーの生態・資源調査及び資源保護育成計画案の作成、②ムランジェシーダーを含む貴重な自然植生保護のため、外来侵入植物の駆除作業、③同森林保護区における森林破壊の現状調査と対策の提言、④植林地の境界線測量、⑤観光資源・施設の維持管理および適切な観光開発のための提言などです。これを見ればおわかりのように、私の仕事というのは、施業計画部という部署の範疇に入るものばかりではありませんでした。そして、私はその中でも①に活動の重点を置くことにしました。

ムランジェシーダーというのは、数百年かけて、直径1m以上、高さ40mに生長するヒノキ科の樹木で、南部アフリカの山岳地域に島状に分布しています。ムランジェ山では19世紀末より、組織的な伐採が行われてきたため、現在その資源は非常に少なくなっています。また、頻発する山火事により、その天然更新も妨げられています。そこで、その森林の保護育成が急務となるわけですが、森林局には、シーダー資源の現状に関する資料がほとんど無く、その資源の全体像を把握しているスタッフもおらず、"保護育成"と言っても一体どこから手をつけて良いのかわからない状態でした。

そこで、私はまず野外調査と航空写真とから植生図を作成し、また、各林分を観察して、ムランジェ山の生態系と植生遷移の中で、現在残っているシーダーの林が、どういう状態に置かれているのかを理解することから始めました。さらに、現在行われている施業を1年を通して観察することにより、その問題点も浮かび上がってきました。これらの結果をふまえて、今後の施業に役立ててもらうために、必要と思われる作業案を盛り込んだ、シーダーの資源に関する報告書をまとめました。

一方、これらの調査と平行して、シーダー林保護育成のための施業も手がけましたが、2年半という月日は、林業において一定の成果を生み出すには、あまりにも短く、作業の進歩はそれほどはかばかしいものではありませんでした。しかし、シーダー林の保護育成という、大変に長い月日を要するであろう作業の"種"をまくことはできたのではないかと思っています。あとは、私の後任隊員と現地人スタッフの継続的な努力に期待します。

私は学生の頃から環境問題に興味があり、とりわけ途上国の森林破壊や砂漠化ということに関心を持っていました。そこで、何とか途上国の緑作りに参加できる道はないかと考えていたのです。そこで出会ったのが協力隊でした。もちろん、大学を卒業しただけの知識と経験で、すぐに途上国の役に立てるなどとは思っていませんでした。むしろ協力隊参加を良い学習の機会と考えたのです。そしてその結果は、とても実り多いものとなりました。外国語の修得をはじめ、熱帯林業や熱帯林破壊の現状をその現場で体験でき、さらには、現地の人々の暮らしぶり、考え方、人となりなどを、肌で感じることができたのです。

もちろん、楽しいことばかりではありませんでした。赴任していきなり現地人社会に放り込まれ、言葉の壁にぶち当たって苦労したり、現地人の物の考え方がわからないうちは、日本流に仕事を進めようとしてうまく行かず、腹を立ててばかりいました。そんなことも含めて、この2年半のすべてが私にとって貴重な体験でした。この体験を糧として、今後も

途上国の森づくりに関わっていければと思っています。

協力隊参加に関心のある方の中には、途上国での2年間の"ブランク"が、帰国後の就職などで不利に働くと考える方がいるかもしれません。しかし、自分にはっきりした目的意識があれば、決してこの2年間は無駄にはならないでしょう。むしろ、その人の今後の生き方の指針となる2年間かも知れないのです。

日本社会の国際化ということがしきりに叫ばれている昨今ですが、その目は常に欧米を向きがちです。でも、若いときの2年間、あえて"主流"に背を向けて、途上国であなたの国際的センスをみがいてみませんか。

（了）

大沢幸生 Yukio Osawa

派遣国：タンザニア
職　種：森林経営
隊　次：昭和61年度3次隊（活動期間1987年3月～1990年3月）
出身地：神奈川県
初　出：「畜産コンサルタント」1989.11.1（（社）中央畜産会）

青年海外協力隊員は、現地の人びとと同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。今回はタンザニアで活躍中の隊員レポートを紹介する。

*　　*　　*

ネックとなる乾期の低温と霜

タンザニアはアフリカ大陸の東部、南緯1～12度に位置し、インド洋に面している。面積は日本の約2.5倍、人口は約5分の1である。

森林面積は、国土の50%と広大である。ちなみに北隣のケニアでは約3.8%に過ぎない。近年問題となっている砂漠化の影響は、タンザニア以北の国々に比べればまだ少ないように思う。しかし、将来は人口が現在の日本と同じ程度にまでなると推定されており、国民の99%までが薪や炭などの森林資源を使っているという状況が変わらないかぎり、とても楽観できるとは思えない。

実際、飛行機で空から見ると、人間が住んでいるところはすぐにわかる。集落の周辺には木がなく、赤茶けた土がむき出しで、それを中心としたかなりの範囲にわたって木が少ないからだ。

私の所属先はタンザニア酪農公社の管轄する11ヵ所の酪農牧場の1つ、キツロ酪農牧場である。この牧場はタンザニアの南西の端に位置し、リビングストン山地へと続くポロト山地に広がる高原に開かれている。マラウィやザンビアに近く、高原からはマラウィ湖が望める。阿蘇の草千里に似た感じの高原で、緩やかなスロープの広い草原が広がっている。

標高は2600～2900mで、気候は冷涼、1年を通して気温が20℃をこえることも零℃を割ることもなく、とても過ごしやすい。ここに住んでいると、他の気候の厳しいところには住めないような気がしてくる。

年平均気温が10℃、年間降雨量が1400mmで、気候区分では熱帯湿潤山地気候になる。一般的なタンザニアの気候は、大雨期と小雨期、そしてその2つの雨期の間にある、暑期と冷期とよばれる2つの乾期との4つに分けられるが、キツロでは半年ごとの2つの季節、5～10月の乾期と11月～翌4月の雨期の2つに分かれている。

乾期の6～9月はとくに冷え込み、霜が降りて高原は毎朝、雪が降ったように真っ白になる。実はこの乾期の低温と霜とが、ここキツロで造林を進めていくうえでの大きなネックとなっているのだ。

風雨にさらされるやせた牛たち

キツロ酪農牧場の総面積は約2万haにおよぶが、現在のところ、約3500haのみが使われている。冷涼な気候のため、低地では病害虫に対する抵抗力が弱く、ホルスタイン種を導入している。現在約2500頭が飼育されていて、総生産量は約140万l。現在の規模でも、酪農牧場としてはタンザニア随一である。

この牧場を含む高原では、ほとんど天然材を見ることができない。まとめても数10haにしか過ぎない点在する林は、皆、過去に人の手で植えられたものだ。

牧場は放牧で牛舎がないから、牛たちは、何もさえぎるものがない高原をやってくる雨や風に打たれている。また、乾期になって牧草が不足してくると、牛たちはたちまちやせてくる。冷たい風の中のやせこけた牛たちを見ていると、かわいそうにと思うばかりだ。

以前、この牧場には獣医師の隊員がいた。予算も施設も不十分な状況が続くなかで、牛の病気を少しでも減らすための方法として、防風林を育てて環境を改善していくことを思いついた。そして、森林経営の隊員が派遣されることとなったのである。

私は2代目の森林経営隊員で、現在、苗木の安定生産をめざして活動を続けている。前任者がポットを使った育苗・造林を導入してから3年が過ぎ、作業員も個々の作業に習熟してきている。また、昨年は新しい苗畑が完成し、本年度がそこを使った本格的なスタートとなった。作業スケジュールを定着させることが今年の目標である。

3ヵ月遅れで何とかスタート

キツロの場合、気温が低いことと乾期に霜が降りるという2つの気象条件によって、どうしても作業の時期がかぎられてしまう。作業スケジュールは余裕

のないものにならざるを得ないが、自分としては、今年はうまくいくだろうと思っていた。しかし、ポット造林で一番基本となるポットが、原料切れのため長い間生産が止まっていて、在庫もなく手に入らない。そんなわけで最初のポット作りからつまづき、スケジュールはすっかり狂ってしまった。

ポット購入の動きは、ポット作りを始める予定の3ヵ月ほど前から始めた。そしてそれから6ヵ月間、毎月工場に通ったのだが、そのたびに「来月には原料が手に入って○日には製品を用意できるから、○日また来てくれ」といわれるばかりだった。タンザニアでは、どんなに約束ができていようとも、実際に現物を自分の手にするまでは安心できないということを改めて認識させられた。そんな状況が続くなか、一時は今年の苗木生産は諦めようかと考えたこともあった（実際、取り止めた苗畑もある）。

スケジュール的には、2ヵ月遅れでポットを手に入れた。そしてやっと始められると思っていたのだが、今度は牧場のトラクターがすべて故障で止まってしまい、ポット用の土が運べなくなってまたもストップ。トラクターの修理が終わって土を運び、ポット作りを始められたのは、予定から3ヵ月遅れの7月に入ってからで、霜の季節に入ってしまった。

ポットについては、もっと早くから動いていれば時期に間に合うように手に入れられたかもしれない。土の運搬も、ポットを待たずに運べるときにやっていれば、何の問題もなかったはずだと反省している。タンザニアで仕事を始めて1年が過ぎ、もうじゅうぶんわかっているつもりだったのだが　…。

このような国でスムーズに仕事を進めるには、早すぎるくらいから動き、チャンスがあればその時点でやってしまう姿勢がたいせつである。だが、たとえすべての条件がそろっても、スケジュール通りに進めることは難しい、ましてや、ほとんどの場合、条件や状況が完璧にそろうことはないのだから。反省すべき点の多い1年であった。

（了）

安　洋巳 Hiromi Yasu

派遣国：タンザニア
職　種：森林経営
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1992年4月）
出身地：大阪府
初　出：「測量」1992.10.25（(社)日本測量協会）

着任

1989年7月18日早朝、ダルエスサラーム国際空港に到着した。初めてのアフリカ。強い日差しが東の空から照りつけている。木々の緑と、土の色、空の青さ、その3つの原色がまぶしいくらいに広がる風景が、鮮明な印象となり心に焼きついている。

私が配属されたのは、首都開発公団の緑化保全部林務課であった。タンザニアでは現在、首都を海岸部のダルエスサラームから内陸部のドドマへ移すべく、1978年からドドマの首都開発事業が進められている。首都開発公団はその事業全体を担っており、特に緑化保全部は新首都ドドマの市内やその郊外の緑化事業、そして中心地を取り囲む2万haの森林保全区、新規造林区を含むグリーンベルトの森林経営業務を行っている。タンザニアは以前から日本に対し、機械の援助を含めた技術協力を要請していた。そこで1985年に当時日本において唱えられた「緑の平和部隊」構想に基づき当公団と協議の結果、1986年12月から、異なる職種の青年海外協力隊員を複数名同一プロジェクトから派遣した。そして、異種業務間の協業による相乗効果をねらう新しいタイプの派遣方式「タンザニア緑の推進協力プロジェクト」が6ヵ年の計画でスタートしたのである。

緑化保全部内の林務課、穀物開発課、造園課、そして機材保守のためのガレージ部門に職員が派遣され、それぞれの現場を担当し、タンザニアの人の技術援助とともに、日々活動している。

私の活動内容

私が配属された林務課では、ドドマ近郊の農村を対象に、私と技術助手と2名で緑化普及と村落林業開発を担当している。1989～1990年度は前任者から引き継いだ2ヵ村の共有林新規開発植林。1990～1991年度は、こちら3ヵ村の共有林メンテナンス業務と、2ヵ村の新規開発植林を行った。さらに毎年対象村の小中学校、村役場、教会、そして各農家への苗木の供給も行っている。植林のための地あつらえと植え付け、下草刈りなどの仕事は、雨期である12～3月の4～5ヵ月の間に集中的に行わなければならない。そのほかの時期は常時村々を巡回し、村の公共施設、各小学校、植林を熱心に行っている農家に対し、植林後のメンテナンス作業の指導や、かれらの苗木に対する需要などの尋ねて回るのである。また、彼らが個々に抱えている、白蟻の食害に対する対策や、灌水用の水不足などの問題に対し、当プロジェクト側で実行可能な対策をたてるのも仕事のひとつである。各村落の共有林の植林作業については、現場監督および技術助手の助言を得て企画、実行している。

しかしながら、私の担当する村落林業開発計画の内容について日本における業務内容と比較するのは難しい。というのは、日本では地域住民の自主的な植林を促すという内容の業務があまり行われていないからである。植林の目的が林業という経済活動の一環である場合はともかくとして、砂漠化防止、森林保全という意味が加われば、なおさら地域住民の生活との関係を論ずるのは難しい。ただ確実に言えることは、日本国内でこのようなプロジェクトが行われているにしろ、いないにしろ、森林資源と直接につながりの深い生活をしている住民がこのタンザニアにおいて、環境保全対策、経済活動という両面から今後ますます地域住民による地域住民のための植林活動が全国的に展開されていく必要がある。そして、日本人のフォレスターの現場での活躍が要求され、必要となってくるであろう。日本人フォレスターでこのような国の植林現場で働ける人々が、もっともっと増えてもいいと思う。

協力隊に参加して

タンザニアの中央部標高1,100mのドドマは南緯4度、年間降水量400～800mm。1980年から1990年まで10年間の年平均降水量は577.2mmで半乾燥気候帯に属している。日本では見ることのできない広大なサバンナの風景の中に広がる。仕事の関係でドドマ市近郊の農村に週3～4日出掛けているが、そこで出会う人達は生活の一部を近代化されつつも、昔からの農業、牧畜の生活を続けている。都市にくらべ生活レベルは格段に低く、いわゆる"もの"が少ない生活を送っているが、私が忘れていた人間味（心の温かさや助け合う気持ち）のある人たちが多い。そして彼らは決して人を裏切らない優しさを持った人たちである。村人たちと毎日接するたびに、その人

柄の温かさと、サバンナの大自然の中で培われた文化と、私自身に染みついている日本人文化がいかに異なっているか、よく考えさせられる。

あるいは数少ない共通点から普遍的な人間の姿を発見し、新鮮な感動を覚えることもたびたびである。また私自身、彼らの持つ文化に接することによって、いかに変わったか、帰国後「日本文化」の鏡に自分を移してみて確認するのが今から楽しみである。

（了）

金子修一 Shuichi Kaneko

派遣国：グァテマラ
職　種：植林
隊　次：平成3年度1次隊(活動期間1991年7月～1993年7月)
出身地：山口県
初　出：「林業技術」1993.9.10（(社)日本林業技術協会）

グァテマラは、太平洋・カリブ海に望む大自然に囲まれた美しい国です。農業人口が大半を占め、コーヒー・バナナ トウモロコシが主な産物であり、数々のアメリカ資本の大企業が、農場や果樹園等の経営に携わっています。

私は、グァテマラのアルタバラパス県、県庁所在地にある国立公園・ラスビクトリアスにて活動を行っています。現在、こちらへきて1年7ヵ月がたち、残りの任期もあと6ヵ月となりました。私自身、こちらの生活にも慣れ、チャビーノ（グァテマラ人）になった！と思っていたのですが、いやいや、まだまだ日本人？のようです。

私は、この国立公園の未整備地内で、減少しつつある在来樹種の保存、そして公園の美化整備に当たっています。

今から3ヵ月前のことです。植栽密度の概念を現地の人々に認識してもらうために、減少樹種であるアメリカフウを植栽し、植栽間隔の違いによる木の成長を計測する企画を実行に移しました。

当初、現地の人々は私の考えをよく理解してくれ、計画も順調に進んでいるような気がしていたのです。しかし労働者へのこの計画に対する説明の少なさ‥つまり、この国立公園の労働者はスペイン語（グァテマラの公用語）ではなく、現地語であるケクチ語を使用しており、言葉によるお互いの意志の疎通の悪さにより、双方の間に解釈のズレが生じていたのです。

私の考えとしては、「果樹木の小さいものは、植栽木に影響が出るまでは残し、大きいものは、果樹を収穫してから切る。山の幸をできるだけ現地の人々に還元する」というものでした。しかし、現地の人々は「さすがは金子。山の動物たちのために果樹木を残し、植栽も大木の近くには植えていない」と思っていたのです。

ですから、果樹を収穫したとたん「木を切る」と言い出した私を疑いの目で見ながら、「大木を切れば有形無形の利益がなくなる。大木になるのに何年もかかるが、苗木を代わりに植えても、ここまで育つとは限らない。それにここは国立公園だ。動植物層の環境維持も考えなければならない場所だ。植栽間隔の実験なんかどうでもいいじゃないか。このまま木を残そう」と言うのです。

彼らから、"植栽地を変えたら？"との案も出ましたが、私としては、自分の計画を否定されたようであまり気分の良いものではありません。また植栽地を変えた場合、植栽間隔の観点から植え直しは100本近くになるであろうし、もちろんそのための土地の伐開からやり直しです。

「これは2度手間だ。帰国前にこんなことをしていては残りの任期の計画が崩れる」との思いから、果樹木を切る方向で皆にこんこんと説得をしました。しかし皆は、やり直しの大変さは理解してくれたものの、それでも"残すべき"という姿勢を頑固に崩さないのです。

…確かに、よく考えれば彼らの意見のほうが正当でしょう。植栽のやり直しによる実験上、配置上の問題等々、かなりのリスクはありますが、木が残る利益のほうがはるかに大きいし、彼らにとっては植栽密度の観念よりも、現実問題のほうが重要なのです。逆に彼らに説得されてしまった私です。

いま思うに、"私はグァテマラ人になれた"という感覚は誤りで、日本人とグァテマラ人との中間に立っただけではないかと思います。日本人感覚なら、最初の植栽前にすべてを切り倒そうとするだろうし、グァテマラ人なら最初から大木のない場所に植栽し、その大木を切り倒そうとは夢にも思わないでしょうから。

何しろ、大変なことになったものです。おかげで2度手間、5ヵ月後日本に帰るとき、さまざまな経験から、私がどのような人間になっているか、不安と期待がいっぱいです。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

漁具漁法

〈漁具漁法〉年度別・国別派遣実績

国　　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
マレイシア	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
フィリピン	33	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	35
スリ・ランカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈アジア地域〉	44	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	46
モロッコ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
シリア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
チュニジア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
〈中近東地域〉	4	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	6
ガーナ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ケニア	16	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	19
セネガル	6	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	9
タンザニア	14	0	1	0	0	0	2	0	0	2	0	19
ザンビア	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
〈アフリカ地域〉	40	1	1	2	0	0	2	0	0	5	0	51
コロンビア	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	4
コスタ・リカ	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
エル・サルヴァドル	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ホンデュラス	12	1	0	0	1	0	0	3	0	1	0	18
ニカラグァ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
パナマ	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	3
〈中南米地域〉	16	2	1	0	2	0	3	5	1	2	1	33
フィジー	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
パプア・ニューギニア	7	1	0	1	0	2	0	1	0	0	0	12
トンガ	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
サモア	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
ソロモン諸島	8	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	10
〈オセアニア地域〉	28	1	1	2	0	2	0	1	0	0	1	36
合　　計	132	4	4	4	3	2	6	6	1	8	2	172

倉田九豪 Kyugo Kurata

派遣国：スリ・ランカ
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1988年12月）
出身地：千葉県

初　出：「水産世界」1989.4.15（（有）農林水産研究所）

スリランカで漁具漁法の指導

私は海外青年協力隊漁具漁法隊員として、昭和61年12月より63年12月までスリランカへ派遣されて協力活動を行なって来ました。帰国後に原稿を依頼されましたので印象深かったことを少し書いてみたいと思います。

私はスリランカ政府の漁業省へ配属され、スリランカ一の漁村、ミーガムワ（英名ネゴンボ）に赴任しました。スリランカと申しましても、伝統的零細漁民が多数を占め、彼らはアウトリガー付きのカヌーで出漁してゆきます。又、各国の援助により、FRP+7.5フィート船外機船も近年急速に普及しました。その他35トンのディーゼル船などあり、最も大きな漁船は13トンのディーゼル船です。

はじめの半年はミーガムワにある漁具漁法を調査することからはじめました。投網などの零細漁法からディーゼル船による底曳き網まで、ほぼひと通り実際に漁船に乗せてもらい調査しました。なかでもマグロ延縄漁が印象深かったので、それについて述べたく思います。

3.5トン船でマグロ漁

日本から伝えられたマグロ延縄漁業がここでは立派に普及しています。私は35トン船のマグロ延縄漁に同行しました。船員は5人で4日間陸の見えない沖へ出ました。小さい船なのでみんな雨ざらしの甲板で寝ます。獲物は、キハダマグロ、メカジキ、マガツオ、サメなどですが、サメはこの国では貴重なタンパク源です。漁獲物は魚倉で氷蔵にしますので、初日の獲物は当然鮮度が落ちています。エサはイカやイワシ、カツオのぶつ切りなどなんでも利用します。

さて、揚網のときサメやマグロに食られずに残ったエサが揚がってきます。日本では当然それは鈎からはずして捨てます。ところが彼らはていねいに、すでに悪臭を放ちはじめたエサを回収しました。私はたずねてみました。「そのくさりかけたエサはどうするのだ」「日に干して市場へ売るんだ。」「誰れかが食べるのか。」「俺たちは食わないよ、街の知らない連中が買って行って食べるんだ。」とのことでした。スリランカでは魚は、香辛料をたっぷりかけて煮込んで激辛のカレーにしますので、少々いたんだ魚でも辛さでごまかされます。あるいはこれが暑い国の知恵なのでしょう。（冷凍設備がないので鮮度を保つほうが無理な話）それにしてもサメも食わなかった魚を干して売るなんて、世の中にはちゃっかり者がいるもんです。

船についている計器は磁器コンパスだけでした。やはり行方不明になる船も多く、遠くバングラデシへ漂着した事件もありました。もちろん私が乗った船は何事もなく帰漁しまして、船長の腕に感謝しました。

さきほども書いたように、魚倉には氷をつめます。氷が切れると魚が腐り、損します。そこであるならず者がホルマリンで魚の鮮度を保つことを思いつきました。一時ホルマリン漬けマグロが出廻わり、食中毒死者事件がおこりさわぎになりました。私が同行した船の人達は、ちゃっかり者ですがならず者ではなかったのでホルマリンを注入するようなことはしませんでした。その後、漁業省が調査に乗り出してホルマリン事件は落ちついたようです。

エビ漁で生計を立てる

2年目より資源調査を行ないました。ミーガムワには直径約13キロメートルのラグーン（潟）があり、そこで獲れるおもにエビ、カニについて調査を行ないましたが、くわしい内容は略します。

ミーガムワラグーンではほとんどの漁師はエビ漁で生計を立ててます。生産されたエビは大きいものは輸出業者が買い取ってシンガポールや日本へ輸出されます。ラグーンの漁師はすべて零細漁業を営なんでおります。それはあとで述べますように、漁師が過剰なので効率的な漁法が入り込む余地がないからです。

資源調査をしておりますと、漁師は口をそろえてエビが減ったと訴えます。過去の統計がないのでくわしいことはわかりませんが、毎日漁をしている漁師達が言うので確かでしょう。理由は色々と考えられますが、中でも印象に残ったのは、民族抗争により北の豊かな漁場から締め出され、漁師が過剰になったと言うことです。タミルーシンハラ民族抗争

激化（昭和60年旬）以前は多くのミーガムワの漁師が北部のタミル人居住地域の豊かな漁場へ季節的出かせぎ漁へ行ってました。そこを締め出され、行き場をなくした漁師がミーガムワラグーンで過剰になったのです。現在、漁獲努力がなされていない北部は資源が余っているとうわさされています。

アサリとウナギを出荷

さきほども述べたように、2年目より資源調査を行ないましたが、調査が軌道に乗ると、かなり時間的に余裕がでてきました。そんなとき、ある女性隊員が「ここではアサリはとれないの、もしとれたら在スリランカの日本人、韓国人、イタリヤ人の奥様方に売れるね。」と言ってきました。さっそく知り合いの漁師とともにラグーンへ乗り出して調べたところ、けっこういることがわかりました。首都コロンボに外国人がよく買物に来る魚市場があります。そこへさっそくアサリを少量おいといてもらいました。店の人は売れるかどうか、半信半疑だったのですが、すぐにアサリは売れました。スリランカ人は一般に貝類を食べないので市場にアサリが出たのははじめてだと思います。その後順調に売れたので、この知り合いの漁師に、集荷運搬卸を引きつぎました。

アサリに気をよくした私は今度はうなぎ売りを考えました。ミーガムワでは時々うなぎが獲れるので、それを日本食レストランに売ろうと思い、サンプルをもってゆきました。さっそく交渉をはじめたところ、うなぎは定期的に入荷できないとダメだと言われました。私は「獲れたときだけ特別メニューとしてお客に出せばいいのではないか。」と言ったところ、厨房の冷凍庫を開けて日本から輸入している冷凍うなぎを見せてくれました。つまりすでに定期的に輸入しているので、不定期に入いる私のうなぎは不用だ、と言うことでした。うなぎをも輸入する日本の経済力におどろいてしまいました。

最後にさきほどのアサリ商売は、今では細々と続けています。と言うのは、はじめのうちは珍らしくて売れたアサリも、毎日食べるものでないし、アサリを食べる外国人人口もそう多くないので需要がガクッと減ってしまったのです。

（了）

倉田九豪 Kyugo Kurata

派遣国：スリ・ランカ
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和61年度2次隊(活動期間1986年12月～1988年12月)
出身地：千葉県
初　出：「海外新聞」1989.12.25（(社)日本海外協会）

あさり物語

わたしは青年海外協力隊漁具漁法隊員として、シュリーランカ（日本では"スリランカ"と記されていますが、正しくは、Shrii-Lankaaと発音）へ派遣されました。業務内容は、ミーガムワ・ラグーン内の漁業資源、主にエビのサンプリング調査です。

毎日の作業で要領をおぼえ、時間的に余裕ができてきたころに女性隊員K嬢が訪ねてきて「ミーガムワでは"あさり"はとれないの？とれたら日本の奥様方に売れるわね」という話をしていきました。

早速、わたしは知り合いの漁師S氏に「"あさり"はとれるのか？」とたずね、カヌーをラグーン内へと出してもらったところ、わりと簡単に"あさり"がとれることが判明した。

そこで、コロンボ市内にある魚屋で海産物のおおよその値段を調べ、また、コロンボ市内の「さくら」と言う日本食レストランの人に話を聞いてみた。それによると、ある人がミーガムワで"あさり"を仕入れて「さくら」に卸しているそうだ（その人は別のところに卸していない）。値段は1個15RS（1RS＝日本円にして約45円）、これは約60RS／Kgにあたる。これで、だいたいの値段は見当がついた。

運搬手段は、"あさり"は海水がなくとも3,4時間は生きているし、生産地からコロンボ中心部までバスで2時間程度なので、少量ならバケツに貝を入れて運べばよい。

最後に市場については、日本人奥様方がよく利用するコロンボ市内の「コルビディヤマーケット」という市場の中にある3軒の魚屋の内の1軒に"あさり"を生きたまま運び、主人と交渉した。売れるかどうかわからないので値段は後で決めることにして、ともかく店に出してもらった。

"あさり"は、すぐ売れた。わたしは「値卸60RS／Kg」を主張していたのだが、主人は「70RS／Kg払う」と言った。これで"あさり"の生産・運搬・販売の可能性が確認された。

しばらくは"あさり"を卸しに来て様子を見ることにした。最初は、売れるものだから1回に15Kgくらい運んでいたが、すぐに6Kgくらいに落ちついた。卸値も、60RS／Kgに下った。需要供給のバランスが落ちつき、これなら大丈夫と確信してから前途の漁師S氏にこの商売を引き継いだ。

それぞれのもうけは、〈漁師〉が6人で合計約6Kgとり、1人1Kg50RS、〈S氏〉が1Kgにつき10RSのマージンをとりバス代186RSを差引いて44RS、〈魚屋〉が1Kgにつき60RSのマージンをとるので360RSとなる。

ところが、最近になって知らない奴がこの商売に割込んできた。おいしいアイデアを横取りしてくる者はいつもいるものだ（いやいや、わたしだって「さくら」の"2番煎じ"ではないか）。新参者は、ミーガムワよりさらに北方で"あさり"を仕入れ、我々のとなりの魚屋に卸している。しかも新参者のほうが質がよいとのこと。おかげで魚価も落ち卸値50RS／Kgになってしまい、供給もだぶついている。

とは言うものの"あさり売り"のうまみは、あさりとり漁師が大収入にめぐまれない零細エビとり漁師たちなので、網やカヌー等の漁具をつかわないで現金収入を得られるため、彼らは喜んでいる。

・数日後・

この原稿は、1ヶ月ほど前に書いたもので、その間、ずっと資源調査に専念していて、最近ひさしぶりにS氏に会ったところ、魚屋の主人に「もうあさりはいらない」と言われたそうだ。一方、となりの魚屋は順調にあさりをさばいているそうだ。つまり、我々は競争に敗れてしまったのだ。S氏は残念がっていた。彼には気の毒だが、こうやって"あさり漁業"が広がってゆけばそれで良いと考えている。

（了）

高橋信吾 Shingo Takahashi

派遣国：ガーナ
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和60年度1次隊（活動期間1985年7月～1988年7月）
出身地：静岡県

初　出：「水産世界」1989.3.31（(有)農林水産研究所）

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野に亘っており、それぞれ活発な活動を展開。その1つ、ガーナで漁具漁法の指導に活躍した隊員のレポートを紹介しよう。

*　　*　　*

飛行機は真夜中に到着した。闇の中、いくつかの裸電球が、建物のありかを示しながら光を漏らしている。静寂、そして幾重にも重なり合った生暖かい大気。あたりに重くのしかかる暗闇。その中では、眼光を放つ小動物のように何かがうごめいている。

ここはどこなのだろう―長時間の飛行で朦朧となった頭で、タラップを降りながら考えていたのを思い出す。

これは1985年7月23日、私がガーナに到着したときの日記のひとこまだ。この日から、私の3年間のガーナでの青春が始まったのである。

ガーナの国情

まず、ガーナという国についてふれてみることにする。ガーナはギニア湾に面する西アアフリカ諸国のほぼ中央部に位置し、南はギニア湾、東はトーゴ、北はブルキナファソ、西はコートジボアールにそれぞれ接しており、その海岸線は約560kmにもおよぶ。

ガーナはほぼ長方形の国で、面積は23万8537km2、これはイギリスとほぼ同じ広さで、日本の約3分の2に相当する。東部と中央部の山岳地帯以外は一般に平坦地。国を貫くようにボルタ川が流れている。のボルタ川開発計画により、1965年にアコソンボダムが完成。これによってできたボルタ湖は面積8400km2に達し、世界最大の人造湖といわれている。

この国を地勢上から見ると、①海岸線に隣接した砂浜地帯、②海岸から内陸に向かって90kmぐらいまでの草原地帯、③南西部およびアシャンテ地区南部の森林地帯、④森林地帯の北に広がる乾燥地帯と、だいたい4地帯に分けることができる。

気候は熱帯性で、サハラ砂漠から吹き寄せる、ハマターンと呼ばれる暑く乾いた埃っぽい北東貿易風と、海上から吹く、比較的涼しく湿気を帯びたモンスーン、あるいは西南貿易風の影響を受ける。季節は雨期と乾期に大別され、時期は場所によって差はあるが、5月から9月までが雨期である。この時期はガーナー帯で雷雨やスコールが多く、短時間ではあるが強く降る。

乾期は10月頃から、3、4月頃まで。乾期中、特にガーナの北部は厳しい暑さが続く。11月から1月はハマターンが強くなり、サハラ砂漠の砂塵が運ばれて空気が埃っぽくなり、どんよりと曇ったすっきりとしない日々が続く。昼と夜の気温差が激しい季節でもある。

住民は大部分がネグロイドで、各地域ごとにいわゆる部族社会を形成し、大きく分けるとガーナ北西部のダガーテ族、北東部タマレ周辺のダゴンバ族、中央部のアシャンテ族、南西部のファンティ族、そしてアクラ周辺のガ族、南東部のエベ族がある。おのおの特徴をもち、またそれぞれに異なった言葉を使用しているので、ガーナの共通語は英語が一般的である。

ガーナ経済の中心は農業で、労働人口の約60%が農業に従事し、国内総生産の約55%を占めている。とりわけ、ココアはモノカルチャー的性格をもち、ガーナ経済はココアの価格および収穫の動向に大きく左右されているといえる。ガーナのココアは世界総生産の約27%を占めており、ガーナの外貨収入源の大半を賄っている。

ココア以外の輸出産品には木材、金、ダイアモンド、マンガン、ボーキサイトなどがあり、これらとココアで総輸出の90%以上を占めている。工業は原材料や機械部品の不足により、停滞状況にあるといえる。

ガーナの水産事情

本題のガーナの水産事情に移ろう。生産高から見ると、アフリカではセネガル、モロッコに次ぐ漁業国である。他のアフリカ諸国と異なり、魚類の消費が伝統的に多く、輸入も多い。これは、肉類が魚類に比べて50～100%も高く、かつ供給が少ないためで、魚類が蛋白食糧の供給源となっているのである。

現在、漁村は海岸地帯および内水面（ボルタ湖）沿岸に分布しており、海岸地帯の種族は伝統的なカヌー漁業に従事している。いくつかの海岸種族は漁業を主要な生活手段し、特にファンティ族は西アフリカのすべての沿岸で漁業に従事している。カヌー漁業は目の細かい網を用い、主としてイワシ、サバを漁獲しているが、地引き網にもカヌーが用いられている。

漁船の動力化は１９５０年代から始まり、１９６０年代に入って沖合漁業が開始されるようになった。それとともに政府は漁業の近代化を促進する奨励策をとり、その結果、水揚げは大幅に増大した。ただ、その要因は海の漁船の動力化によってもたらされたもので、９０％以上が海産魚だ。ボルタ河口の潟湖、ボルタ湖、その他内水面にはかなりの漁業資源が存在するにもかかわらず、まだ十分な開発がなされているとはいえない。この内水面漁業については、アコソンボダムが建設されて以来、その発展のために各種の措置がとられている。

その１つが、数ケ所に設けられた漁業学校で、ここでは青年を対象とする訓練と成人を対象とする技術指導が実施されている。また、孵化場が設けられ、養殖を目的としてテラピアの稚魚が生産されている。政府はボルタ湖の潜在生産力を年間４万トンと推定し、漁業事務所を新設して漁獲統計を収集する一方、資源量評価を行い、また漁網や船外機を購入し、漁業者に緩い返済条件での貸し売りを実施している。

それでは、具体的な活動内容についてふれていこう。

ボルタ湖の漁業の歴史は浅く、豊富な資源量が見込まれているにもかかわらず、その開発はまだまだ遅れている。ほとんどの住民が巨大なボルタを眼前にしながら、漁業知識がないために昔ながらの農耕作業のみにより生計を立てていた。しかし近年、職業としての漁業の有望性、資源量の豊富さから、ボルタ湖沿岸の住民の間では、漁業への転向、または農業との両立という動きが盛んになってきた。必然的に、政府や各国の支援団体による普及活動の展開にも大きな関心が寄せられている。

指導プログラム

農業省水産局に配属された私の主な仕事は、ボルタ川開発計画の一環として設立された漁業訓練校での授業プログラム作りと現場での授業、実習指導である。また、いくつかの漁村にこの漁業訓練校の分校が設立されており、それらの巡回指導を行うのも業務の1つであった。

訓練プログラムは3ケ月の理論、6ケ月の実習に分かれ、この訓練校では実習に重点が置かれていた。生徒の年齢層は16歳から40歳ぐらいまでで、そのほとんどが農業従事者。生計の一手段として漁業を覚えようという、いわば"村の男たち"である。3ケ月の理論では、基本的な漁業一般の知識や魚類の生態・生理といった科目を中心に授業を行った。また、近年はナイロン製の網も普及しており、合成繊維網の知識も必要だ。中には小等教育すらまともに受けていない者もおり、ときには算数や英語の授業も行った。

理論が終了すると実習である。まず網（ほとんどが日本製のモノまたはマルチフィラメントのナイロン網）が支給され、刺網を製作する。この後、約7～10日間の実習漁業計画を立て、生徒と共に実習航海に出るのである。ボルタ湖に点在するいくつかの小島でキャンプ生活を送りながら、漁業の必要な実際的知識の指導を行った。プログラム内容は①水泳法、潜水法、②刺網漁撈法、③船外機の操作および維持、④パドルの使用法、⑤網目の作り方、修理法、⑥漁獲高の記録法である。

コース終了後は終了証が発行され、終了生には貸し売りのナイロン網の購入権が与えられ、水産局などが行っている漁業普及プロジェクトへの就職のチャンスもある。しかし、資材の慢性的な不足や開発計画の沈滞などにより、コースを終了したからといってすぐに漁業に転向したりプロジェクロに組み込まれるのはまれなようだ。

これら訓練校に対する支援体制の充実はいま以上に望まれるところで、小漁村での普及活動の拡充、優秀な指導員の確保、教材・資材の継続的な支給体制の確立といったことのほか、卒業生に対してもその能力に応じて十分な支援体制を整えていくことが、今後の課題として取り組んでいかなければならないだろう。

3年間のガーナでの活動・生活をふり返ってみると、突然、異国の社会の中に入り込み、多くの戸惑いや苦しみもあった。しかし、何かを成し遂げたという実感だけはある。決して大それたものではないが、彼らとの生活の中で、ともに話し、喜び、目的のために何かを考えてきたという実感である。単なる毎日の出来事の連続にすぎないかも知れないが、ここで得た経験と多くの友情は、計り知れないものがある。

（了）

森丘貴宏 Takahiro Morioka

派遣国：ケニア
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和60年度3次隊（活動期間1986年3月～1989年3月）
出身地：神奈川県
初　出：「水産世界」1989 11.20（(有)農林水産研究所）

卒論から協力隊に…

ケニアの西端、ビクトリア湖の辺りにあるキスムという町に、青年海外協力隊の一員として、昭和61年の春赴任しました。

協力隊を、始めて意識したのは高校の時です。ホームルームの時間、担任が"協力隊に参加しようと考えている頃があり、選考試験を受けに行ったけれど、落ちてしまった。"と残念そうに話すのを聞き、それまでは、協力隊について何も知らず、全く興味もなかったのですが、僕も協力隊を目指してみようかなと、軽い気持ちで考え始めました。

大学の水産学科の3年の時、卒業研究の論文を書く為に入った研究室のゼミの先生が、偶然、これまで何人もの協力隊員を送り出して来ている人でした。ある日、協力隊事務局の人が、協力隊募集のポスターを持って、その研究室のゼミに、説明に来ました。"漁具漁法の隊員が、思うように集まらないので、協力を願いたい"と参加を呼びかけられました。その時には協力隊に応募する気持ちが強くなっていたので、とにかく試験を受けに行きました。大学から4人来て、そのうち3人が同じ研究室の人です。事務局の人と直接話をした影響が大きかったと思います。

卒業と同時に行けると考えていたけれども、特に漁業の場合は、船に乗るなどの経験がないと現地に行ってから困るので、国際協力事業団の横須賀にある神奈川国際研修センターで8ヶ月の間研修を受け、その後広尾の訓練所で他の隊員と一緒に訓練を受けケニアに出発しました。大学卒業後、丁度1年たった時の事です。

ビクトリア湖の漁業改良普及員に

現地に着いて先づ、現地の生活に慣れる為に『現地訓練』に入りました。ケニアは、近代的なマンション、片や土壁の家・萬葺きの屋根等、貧富の差が激しく、現地訓練では昔からのケニアの伝統を守り生活している、土の壁の家に、3週間ホームステイをさせてもらい、スワヒリ語とその部族の言葉を学びました。飲み水は、川から汲んで来るので、茶色く濁っています。現地訓練に入る前に、医療調整員から、生水は飲まず沸かして飲むようにと注意を受けたが、そこの人は、火を焚く際に、薪を拾いに行く事から始めるので、水を沸かしてくれとも言えずに、最初は少しづつ、日差しが強く暑いので次第にグイグイと飲んでしまいました。腹を下す等色々と云われていますが、私は特に何ともありませんでした。

ケニアは、日本の約15倍の国土面積の中に約23,000,000人の人口を持つ赤道直下の国です。ケニアで魚を主に食べるルオ族は、ナイロテック系といい、ナルル川を上ってきてビクトリア湖で止まった部族で、人口のおよそ13%を占めている、国内3番目の部族です。

ルオ族は、教育に力を入れ、誇り高く、公用語であるスワヒリ語を使わず、ルオ語か英語を話します。彼らは、ケニアのケネディと呼ばれ、奇しくも暗殺されてしまった、昔の外務大臣のトム・ムボーヤ氏が生きていれば間違いなく大統領になった人だと、今でも誇りにしています。その為、一部の部族からは反感を買い、その部族はルオ族の食べる魚を食べないそうです。

現地での僕の役割は、日本流に云えば漁業改良普及員であり、ケニアでの観光野生動物庁水産局西ケニア地区キスム分室の主任として配属されました。ビクトリア湖に棲息するナイルパーチと云う魚の漁獲法の指導をし、ビクトリア湖の漁業の発展に貢献する事が水産局からの要請内容でした。

肉より高い魚刺網か延縄で漁獲

ナイルパーチは、全長2m以上にもなるスズキに似た魚で、キロ単価に換算すると、卸値で30円、マーケットでは500円にもなります。肉は安く200円で、フィレ肉でも240円程です。漁師の平均的月収が3,500円程度なので、いかに魚が高いかおわかりでしょう。

赤道直下で日差しが強いので、舟で運ぶ途中で鮮度が生で食べられないので、揚げるか煮るかして食べます。魚が肉よりも高いのは、この鮮度の問題で、手に入れにくいからです。

ビクトリア湖には、他にラテビア漁を専門にしている漁師さんもおり、岸辺に群棲している所を追い込み漁で獲っています。

ナイルパーチの場合は、サシアミか延縄で獲りま

す。サシアミ漁の船に乗せてもらい、漁師のやり方を見ていましたが、日本であれば獲まえたい魚の大きさが種類や大きさにより網を変えるけれど、網が非常に高いのでケニアの漁師はそうそう買えないので、大小のナイルパーチを1つの網で根こそぎ獲ろうとしています。

そこでそれ程効果が上がらないとしても、網の目の形を調節してあげれば、小魚を獲らないで、漁業のサイクルが守られると考えます。僕の前任の隊員もそう云う事を指導して来ていたので、ある程度は浸透していたのですが、漁師の生活は貧しいので、そうも云ってはいられないようです。

延縄の方法は、1～2km幹なわをとり、3m間隔で枝なわをつけたものを翌日に引き揚げる、日本と基本的に同じ方法であり、自然の節理に逆らわないで魚を獲る方法はどこでも同じだと実感しました。

ケニアの漁業が遅れているのは事実ですが、ケニアにとって、こう云った獲り方が1番合っている様です。日本の方法を一気に採り入れて、漁獲高を急に上げても、乱獲問題を引き起こすでしょう。ケニアの伝統を壊すことにもなり兼ねません。

実情に合わない最新機材を欲しがる

ケニアの水産局が求める事は、日本の最新の技術と、それ以上に欲しいのは機材です。機材の援助をする上で難しい事の1つに、現地で欲しがる日本の最新の機材は、たぶん使いこなす事は不可能だと思います。仮に使えたとしても故障すれば、部品等の問題でなかなか直せないと思います。協力隊の仲間からは“そこまで考えなくても、いいんじゃないか”と言われました。水産局の上司は、この若僧が、何を言っているのだと云う感じで聞いてもくれません。

よけいなおせっかいと水産局に言われましたが、ケニアの漁師にとって長期的に考え、本当に必要な事は、ケニアの伝統と自然を壊わさないで、静かな発展をするための静かな改良だと考えます。

またケニアの人は偉い人には、頭が上がらず、弱い立場の人には強く出る所があるので、漁師の生の声が役所に届かないのですが、僕が漁師と水産局キスム分室とのパイプ役になり、出来るだけ声が伝わる様にしました。

水産局からはよけいな事だと言われてしまいましたが、ケニアの漁師が自立して発展していく為には、機材の援助・2年経過・さよならと云うわけには行かず、1年間任期を延長しました。結局ケニアに3代続いた漁具漁法隊員も、私の代で終わりましたが、それが私の役割であったと感じています。

全てが勉強の3年間

まだ自分自身、何が身についたかわかりませんが、協力隊で活動をしていた3年間で、意識が変わった様に感じます。この間の話ですが、会社へ行く為に家から駅までバスに乗っていた時、後ろのドアが閉まらなくなり、ブザーが鳴りました。運転手が“傘か何かが邪魔をしているので、見てくれませんか”と言うので、僕は1番前の方にいたのに、伸びをして後ろを見たところ、聞こえていないわけはないのに誰1人対処しようとしない。日本人はいつも割りと急いでいるのに、こんな事があると、理解できなくなります。

少しでも協力隊に参加したい気持ちがあるのならば、絶対に行く価値のある事だと思います。日本とは全く異なる文化等は、本やテレビで知る事は出来ますが、実際に接する事とは大変な違いがあると思います。行けば全ての事が勉強になります。上手く言えませんが、後悔する事はないと思います。

これから行く人には、健康には留意して、無事に帰って来て下さい。協力隊事務局も言っていますが、何も出来なくても、健康でいて帰って来れば、それが1番の国際協力ですから。

（了）

坂田重登 Shigeto Sakata

派遣国：ホンデュラス
職　種：漁具漁法
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年3月～1992年3月）
出身地：熊本県
初　出：「水産世界」1991.9.5（(有)農林水産研究所）

授業よりまずサッカーが重要

今日も生徒が来ない。別に生徒が授業をボイコットしている訳ではなく、ワールドカップサッカー"イタリア９０"が開催中だからである。彼らには授業なんかよりサッカーの方がおもしろく重要なのである。

私の職場は、エメラルドグリーンの海が広がるカリブ海、中米ホンジュラスのトルヒーヨというところで、職業訓練校漁業料のインストラクターとして配属されていた。学校は（寺子屋みたいなところである）創立３年とまだ新しく、十分な資材もなく、しっかりとした授業カリキュラムもないのです。

漁業料の生徒は１２人で、授業に来なくなって約１週間が経つ。居所はわかっている。テレビのある家に集まって、みんなでサッカーを見ているのであった。この国は以前隣のエルサルバドルと"サッカー戦争"を起こしたぐらいだから、サッカー熱はすごいものである。生徒を無理矢理学校に引っ張ってきても何の解決にもならない。

我々にとっては、生徒にいかに授業に関心を持ってもらうかが問題である。前の隊員はサッカーチームを作って、毎週月曜日の午後をサッカーの練習にあてたりしていた。しかし生徒に授業への興味をもたせる上では根本的な解決策にはなっていなかったようである。 私が赴任してきたのは、生徒が入学してから約４ヶ月たってからである。その間、漁業担当の先生がいず、彼らはそれまで１度も海上での漁業実習を経験した事がなかった。彼らは漁業に関しては全くの素人である。やはり漁業の楽しさは、実際海に出て、魚を取ることである。私としては、生徒たちの授業への関心を盛り上げるためにも早く海上実習を実施したかった。

漁具を購入する予算もない

船外機及びボートは、前の隊員が揃えておいてくれたのでいつでも準備OKである。しかしガソリンを買うための資金はどうするか。それより以前に、肝心の漁具がない。学校側には網を購入する予算などない。倉庫をさがしていると、古い刺網がいくつか見つかった。これは以前、日本の援助により供与されたものらしい。約10年も前のものであろうか。かなり損傷が激しく、修理にはかなりの時間がかかるだろうと思われた。しかし、文句はいってられない。網修理は生徒の実習にもなるし、ちょうどよい教材である。生徒に教えながら修理を始めた。

しかしながら、網修理など単純で時間はかかるし、つまらない作業である。修理を始めて1時間もたつと、1人2人と生徒が消えていってしまう。とうとう午後からは誰も来なくなった。この分だといつ修理が終わるか分からない。次の日「みんなで一緒に頑張ろう」と言って、生徒をなだめすかし、網修理を再開した。しかし、やっぱり昨日と同じである。生徒が消えて行く。どうしてこんなにも忍耐がないのだろうか。

こういった前準備はしないくせに「早く魚を取りに行こう」という。「それじゃ網を修理しないと魚が取れないだろう」と言うと。「よし、わかった」と言って始めるが、1時間ともたない。私も頭に来て「もう絶対実習なんかしないからな」と言って怒るが、生徒にはどうでもよいらしく、結局修理を終えることはできなかった。刺網の実習は断念せざるをえなかった。

実習までは良かったが結局は学校が閉鎖

自分としても、とにかく早く海に出て実習をしたかったので、比較的簡単に早く準備ができ、ある程度の漁獲を期待出来る物はないかと考えた。そこで次にやったのが底延縄である。今回は準備の段階で生徒にノルマを与え、競争心を起こさせるため、生徒12人を4つのグループに分け、各グループに底延縄1鉢（約60本付）を準備させた。これだとかなり遊ぶ生徒も減った。2日とかからずに準備が終了した。餌は近くの漁師の人に頼んで於いて雑魚をストックしてもらい、安く譲ってもらった。ガソリン代は結局、協力隊の経費でまかなった。

事前に私とカウンターパートで、漁場を把握する為漁に出た。漁場までは船外機で約1時間。朝5時には明るくなるので、4時に出発ということになった。

実習当日、朝4時。やっぱりホンジュラスである。定刻に来たのはカウンターパートと生徒1人だけ。30

分待っても誰もくる気配がない。頭に来るのをグッとこらえ、仕方がないので家を1軒ずつ尋ね生徒を集めて廻った。結局出発したのは5時過ぎてからであった。実習はやはり楽しいのか、生徒自ら進んで船外機の舵を取る。漁場に着くまでは事前に準備しておいた曳網を曳いた。20分ほど走ると竿がグーッとしなった。「来た、来た」ついつい日本語で叫んでしまった。カツオである。2kg近くはあったろうか。初めての獲物で生徒も私も上機嫌である。

漁場に着くとさっそく投縄開始、生徒達に交互にやらせ、スムーズに終了。30分程置いた後揚縄開始。始めてにしてはなかなか好調で、釣竿5〜6本に1匹の割合でかかってくる。生徒も一生懸命である。大型のクーラーボックスもすぐ一杯になり、大満足のうちに終了した。

ところが浅橋についてからがまたたいへんであった。漁具等をボートから降ろし、学校まで持って行って後片付けという段階になると、腹が減ったから帰るという者が出てきた。朝から何も食べていないし、もう昼近くである。明日の準備は午後からするとしても、資材は学校まで持って行かなければならない（歩いて30分ほど）持って帰る途中、やっぱり何人かが消えてしまった。1人の生徒が抜けようとしていたので注意しようと思ったが、いいかげん私も頭にきていたのでけんか腰になってしまった。ついつい胸ぐらをつかんで「もうおまえは明日から学校に来るな」と怒鳴った。

腹を立てたり、生徒をなだめすかしたりして1週間程実習を続けた。準備はろくにしない、後かたづけはやらない。もう2度と実習などやるものかと思った。

その後、政府の財政的問題等により約3ヶ月後に学校が閉鎖される事になった。結局この実習が最初で最後のものとなった。人に教えるというのは本当に難しい事である。ましてや違う国の言葉で。

私は今では別の機関で活動している。今でもたまに以前の生徒に会うと、「Sakata」と言って遠くの方から親しげに声をかけてくる。これがいちばんうれしく思うときである。

（了）

伊藤淳雄 Atsuo Ito

派遣国：パプア・ニューギニア
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和63年度2次隊（活動期間1989年1月～1992年1月）
出身地：大阪府

初　出：「水産世界」1992.8.15　（(有)農林水産研究所）

機械不備、修理で苦労

オーストラリアの北に位置する世界第2の大島、パプア・ニューギニア。大いなる山脈ときれいな海に囲まれたこの国には、ヒクイドリ、オウム、ゴクラクチョウなどの鳥類や有袋類が数多く生息し、その反面石油、銅などの豊富な資源があるとみられ、近年開発が進んでいます。

私は、このパプア・ニューギニア、ニュー・アイルランド島（ラバウルの北方）の州都ケビエンに建設された国立水産大学へ派遣されました。

私はこの学校で講師として漁具漁法を3年間教えましたが、この活動期間には次のようなことがありました。まず、授業を行っていく上での障害が挙げられます。1つは漁具の製作実習で使用するためのハリやテグスが十分ではなかったこと。そのため自分や他のスタッフ個人のものを使い、指導しなければなりませんでした。網などに関しては倉庫に眠っていたものを引っ張り出し、良い所だけ切って使用していましたが、その作業には授業以外の時間を利用し、また自分1人で準備しなければならなかったので大変でした。

2つめは海に出るための機材、つまり船や船外機に関する問題でした。カレッジにはFPRのディンギーと耐水ベニヤ板で作ったカヌー、そして木造船がありましたが、1度水漏れを起こすと修理するまでには予算の関係もあり、ひどい場合2～3ヵ月かかることもありました。また、船外機も取り扱いが悪いため故障が頻発し、その都度修理を行うのですが部品の入手は日本のようにいかず、やはり時間がかかってしまい週1回の海洋実習を行えないことがよくありました。

3つめは、釣りをするために、なくてはならない餌の問題です。この国も大きな町に行けば餌になるような魚やイカは手に入れることができますが、私が滞在していた島では餌は売っていません。そのため、実習に出る前には自らが海へ出てトローリングをしたり、海岸で投網を打ったりして餌になるような魚を捕り、そのあと塩漬けなどの処理をして保存しました。

難しい実習の漁具選択

このようにして初めて海へ出られるようになるのですが、問題を解決するためには他のスタッフの協力がなければとうてい無理なことばかりで、やはり現地で活動するためには現地の人々の協力がなければ何も出来ないと実感しました。

そして何と言っても、やはり1番の問題点は漁具の選択の難しさということでしょうか。現地で行われている漁業には刺し網、地引き網、トロール網などの網を使用したものと、テグス糸を使った手釣り、トローリング、そしてSPCという機関で奨励している木のリールを使った底釣りがあります。この中で網漁具に関しては気温、水温が高いこともあり魚を取り込むまでの間に痛んでしまうことが非常に多いので、このような国に適していないようです。それで定置網をと思いましたが材料費がかさみ、またセットする場所（海にも所有権がある）、網の管理（盗まれる）がとても難しいので諦めざるをえませんでした。

底たて縄は順調に実習

そこで次に釣り漁具を試みることにしました。まず手釣りですが、これでは小さな安価な魚しか捕れず、しかも誰でも知っていることなので今さら教える必要はないものです。トローリングは魚を追い続けなければならないため、とても不経済で、また乗船できる人数も限定されるので実習には適していない事がわかりました。このような人数の問題がもう1つのリールを使った底釣りにも当てはまりました。というのは船にセットできるリールの数には限りがあり、そうなると乗船できる人数も、おのずと限られてくるからです。

となると、この国では知られていない漁具を使用するしかありません。それは底延縄と底縦縄でした。材料に関しては現地で手に入ったり、専門家の方からいただいたりしたので、漁具は以外と簡単に作ることができたので助かりました。しかし実際に行う段階になると、先に述べた餌の確保がハリ数の多い底延縄ではとても困難なのです。

またこの事以外に、底延縄実習は手間をかけただ

けの結果を得られることが極めて稀であったり、実習の後始末に手間が掛かったりと、これらの事が生徒たちにとってはヤル気を無くす1番の原因となりました。そのため数回実習しただけで諦めなくてはならなくなりました。

しかしもう1つの漁具、底縦縄については、特に問題もなく順調に行うことができました。生徒のヤル気を出させるための要因である釣果に関しては少ない日もありましたが、その代わり大きな個体の魚が釣れるので、生徒達はいつも楽しみながら実習を行っていました。

気長に厳しく接する

そして最後には言葉の問題と生徒の問題が挙げられます。授業で使う言葉は英語で、最初はうまく話すことができず困りましたが、時が経つにつれこの問題は徐々に解決されました。しかし生徒の問題は最後まで引きずることになってしまいました。カレッジに入ってくる学生というのはある程度の知識を取得した者たちですが、レベルはとても低く、その上やる気のない者が多かったため、何度教えても次の日には忘れてしまい、教えるのが嫌になることしばしばでした。

また、ときには怒ってしまうこともありましたが、なるべく気長にかつ厳しくする事で少しは学生達もついてくるようになりました。人にやる気を出させ、理解させることがどんなに困難であるかということを彼らから学ぶことができました。

任地での余暇の楽しみ方についてですが、カレッジが終わったのち家に戻っても、まだまだ日が高いため、暑くて何もする気が起こりません。そのためどうしても涼しい場所へと向かうことになります。カレッジの実習所は海岸に作られていたので、そこに行ってはココナツの葉陰で休んだり、スタッフと馬鹿話や雑談をしながら夕方まで過ごすことが多く、また時々、そこで魚を捕っては網で焼いて食べたりもしました。休日にはスタッフと一緒に釣りに出掛けることもありましたが、やはり１番の楽しみは実習所でビールを飲んでのんびりすることです。

このパプアという国は公共の場ではアルコール類を飲むことが禁止されているので、普通の海岸では飲むことができません。そのため海を眺めながら堂々とビールが飲めるこの場所がとても気に入っていました。あと年に数回行く小さな無人島へのピクニックも楽しみの１つでした。映画館や遊園地などの娯楽が全くないところでも、これまでで述べたような現地での楽しみ方を余暇に取り入れることによって活動をより充実したものにすることができると思われます。以上が、協力隊活動を通じての私のケビエン寸感であります。　（了）

石井優一 Yuichi Ishi

派遣国：ソロモン諸島
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1986年8月～1988年8月）
出身地：東京都

初　出：「水産世界」1989 9.25 （(有)農林水産研究所）

1　派遣前の想い出

参加の動機

私が青年海外協力隊に参加した動機は、「日本人のあまり見たことのない土地への憧れ」と「現在の自分のもっている能力が途上国でどの程度活かせるか」というごく個人的理由からであった。

参加の動機については派遣前研修時同期の隊員との会話でよく話題になったが、百人百様の理由があるようであった。ただ派遣前研修で思ったことは、海外青年協力隊に参加する者の大多数が何かをしようというバイタリティーを持つ、個性的な魅力を持っていたようであった。

「派遣前訓練」

海外青年協力隊員になる前には隊員候補正として研修が実施されるが、この訓練では語学、野外訓練、パネルディスカッション等様々なプログラムが組まれている。

派遣前訓練は合宿所で行われ、殆どが集団活動を基礎とした活動である。派遣前訓練では20歳位から30歳位までの様々な職種の人々と共に寝起きをし、自由時間にはそれぞれの専門分野の珍談、奇談等体験談を中心とした話題に華を咲かせた。

訓練ではこれまで経験が出来なかった程沢山の個性との出会いがあり、あらためて人間の多様性を感じさせられた。

2　ソロモンの沿岸一般事情

数ソロモン諸島は南西太平洋上パプアニューギニアの東部に位置する島嶼であり、チョイセル島（ショアズール）、ニュージョジア島、サンタイサベル島、マライタ島、ガダルカナル島、サンタクルス島（サンクリストバル島）6つの火山島と数百のリーフ島からなる。西岸は珊瑚海、東岸は太平洋に面する。

海流は南道海流を東岸より受け、平行に並んだ島嶼間を複雑に流れる。海底は急傾斜でありカツオ・マグロ類の回遊が多い。

人口は約270,000人であり、首都ホニアラに集中している。

漁業事情

当国の漁業はカツオ マグロ漁業を中心とする商業漁業と沿岸域で行われる零細漁業に分類される。

商業漁業は、日本とソロモンの合併会社であるSOLTAI（SOLOMON TAIYOLTD）とソロモン政府出資のNFD（NATIONAL FISHERIES DEVELOPMENTLTD.）が1本釣漁業を中心として操業をしている他、オーストラリアより施網船が2隻導入され、オーストラリアの漁業会社とソロモン政府の合併企業が操業している。

今後、施網漁業と1本釣漁船の漁場問題が起こることが懸念される。

集魚はバオヤによる集魚が行われており、効果を奏している。このバヤオは当国に産する竹を用いて作られており、アンカーにはコンクリート詰めドラムカンを用いる。

1本釣用の餌は沿岸部で漁獲されており、沿岸漁民に入漁料を支払い漁獲している。餌の取り方は小型の作業艇が餌漁場に出向き小型のブイを投入集魚、夜間に1本釣船と合流、水中灯を投入して集魚して棒受網で漁獲をする。餌魚の種類はミズン等を漁獲している。

資源の統計は水産局の資源調査課で統計をとっており、操業をおこなっている。また商業漁業による水揚げ高は水産局に報告が義務付けられている。残念ながら報告書は発行部数が少なく入手できなかった。

沿岸漁業はリーフ付近の魚を対象として行われる。船内機を用いた漁業は殆ど無く、無動力船か、船外機船である。手漕ぎの舟は写真に示す様な丸木のくり抜き舟であり、手釣り漁業に用いられる。

手釣り漁業の他、トローリング、刺網を用い、集団で追い込む追い込み刺網が行われている。

このほか養殖業として、ジャイアントクラムシェルやエビの養殖が実験規模でおこなわれている。

また、沿岸漁業関連施設として、現在首都ホニアラにFRPボートの製造工場が2件あり、小型の船外機船や氷冷箱を製作している。

3 イサベル

イサベル州はホニアラの北約80マイルに位置し、サンタイサベル島、ニュージョージア島の2つの大きな島と無数のリーフ島よりなる。当島はソロモン諸島で最も細長い島である。イサベル島は首都ブアラ（Buara）にあり、首都のホニアラ（Honiara）よりはブアラ沖合のフェラ（Fera）島の空港までセスナで45分かかる。

その他の交通機関としては船であり、首都ホニアラからの生活用品の搬入、イサベル州の農産物（主にコプラ、ココア）の運搬船兼客船である。船での渡航は日本の客船と違い客室等は無く、デッキ上にキャンバスのオーニングを張りその下にザコ寝をするものである。またイサベル州からホニアラに渡るときはよく乗客の荷物であるブタやニワトリがデッキ上に転がされており、1夜中ブタのキーキーと啼く声とともに航海することもあった。

水産局の仕事は漁民への氷の供給都漁獲、漁民のより漁獲された魚の買い上げ、買い上げた魚の販売である。漁獲された魚の殆どは首都ホニアラに出荷する。

イサベル州の水産局は、ブアラ本部、タタンバ支局、カオロ支局、キア支局がある。1988年8月現在のイサベル州水産局の規模を下図に示す。

州内の各支局で買い上げた魚は、主に首都であるホニアラまで資客船で輸送される。イサベル地区で漁獲される魚の種類と州政府の買上げKGあたりの価格を以下に示す。

1st グレード
　州政府購入価格　$1−40
　ホニアラでの販売価格　$3−80
　キングフィッシュ（ヨコジマオキサワラ）

2nd グレード
　州政府購入価格　$1−20
　ホニアラでの販売価格　$2−80
　ニザダイ
　フエフキダイ
　クエ
　ハタ
　フエダイ
　ヒラアジ類
　ボラ類
　その他

3rd グレード
　州政府購入価格　$0−60
　ホニアラでの販売価格　$1−80
　ソウダカツオ
　カツオ
　ブダイ
　クレイフィッシュ（イセエビ）
　州政府購入価格　$5−00
　ホニアラでの販売価格　$12−00

イサベルの漁民は殆どがコプラ等の小規模プランテーションとの兼業である。このため漁民は夕方から深夜にかけて漁をすることが多く、また使用している船も手漕ぎの1人用木彫りカヌーであるため（写真参照）氷冷箱の使用は非常に困難である。

魚は釣獲後カヌー内放置されることになり、ひどい時は水産支局に持って来た時には半分腐りかけている様なこともあった。しかし、手漕ぎカヌーでは氷の使用は不可能であり、唯一の方法は生メを釣獲後行うことを指導することと、24時間体制で魚の買い付けを行い、できるだけ新鮮なうちから氷冷保存する他は方法がなかった。

漁法は手釣りふかせ釣り、投げ込み釣り、石落とし釣り（石にラインを巻き疑餌を海中におとす。日本では沖縄地方の一部で行なわれている）その他、浅瀬で刺網を張り、魚をおいこむ追い込み刺網が行われている。

特殊な漁獲対象としてはカメ用の追い込み刺網でリーフ内にいるカメを15人から20人で網まで追い込む漁が行なわれている。主に食用として用いられる。甲羅はホニアラにて販売する。（75cm以下の甲長のものは販売禁止）この漁は主に祭りの時や結婚式の御馳走用として行われる。

魚以外の漁業として、このほか船外機船を用いたトローリング（カツオ、サワラを対象）やサメ（トローリングの際の外道）、沿岸域での高瀬貝（ボタン原料として日本に輸出）、ナマコ（加工乾燥してシンガポール、ホンコン向け）、黒蝶貝（装飾用）、イセエビ（素潜り）等を行っている。

水産局はカメや高瀬貝のサイズ基準を設け資源保護対策を講じている。

また河川域ではウナギ（種別不明味は大味）を良く食用として漁獲していた。また河川にはワニが生息するが、イサベル州でワニを漁獲するのはタブー（部族的禁止事項）とされている。（イサベル州の一部の風習では日本での白蛇と同様にワニが神の化身とされ、大事にされている。）

漁民からの魚の買い付けはセミドレスの形状で計量し購入する。この指導は赴任前から行われていた。この方法は、私も日中に漁獲した魚を丸の場合とセミドレスにした場合で日陰に放置し時々海水をかけ保存し、3時間後焼いて食べてみたが特にブタイの場合には顕著に変化があり、セミドレスにしないブタイは内臓の臭いが身に移りとても食用には適さなかった。

水産局での氷冷方法は、砕氷を用い行う。氷冷箱はFRP性発砲剤入りで、保存する魚はセミドレスになっているため水氷は行わなかった。この保存方法でカツオ1.日間、サワラ14日間、クエ18日間、シマ

アジ15日間の保存が刺身として食せる限度であった。また氷冷箱は平型ではなく、風呂桶型であったためマグロの船内氷冷の様に漁獲物が層状に入れられるため、身の柔らかい魚の保存損傷が激しく特に困難であった。

イサベル州からホニアラ市場までの魚の輸送は、氷冷箱（400L）を用いて行っていたが魚積出岸壁設備の充実している水産支局はキアのみであり（木製岸壁でありかなり痛んでいる）、その他の支局は貨客船に沖付けして行っている。また貨客船で荷揚げ用のブームを有している船は殆どなく小舟からの荷役は人力により行っていた。（1氷冷箱で6人が必要）1度貨客船への荷役作業中に漁獲物を満載した氷冷箱を海中に落としてしまったことがかった。

ホニアラでの漁獲物販売先は中央水産局のマーケッティングセクションで販売先を斡旋してもらう方法とフィッシュブローカーと直接取引する方法の2とおりがある。

1stグレードのキングフィッシュとイセエビは主にホニアラのレストランに収め観光客により消費される。

その他ホニアラの市場では3ヵ所のオープンマーケットがあり、ここでは近隣の漁民やフィッシュブローカーより魚が販売される。

このほかにフィッシュチップス（ホニアラの代表的な昼めしでドーナツ粉を付けピーナツオイルで揚げる）用に取引することもあった。

この販売経路は販売する魚体と品種により分別され、40センチを越える魚は主にフィッシュチップス用として、小型の魚は直接消費者に販売される。消費者への販売価格はkgあたり＄2−50から3−00である。これらの鮮魚流通はおもに氷冷により行われるため、鮮度の維持は生産者、流通関係者にとって大きな問題となっている。

ホニアラでは魚を見て取引することが習慣となっているため、せっかく運んできた魚もバイヤーとの取引の間に1匹づつ氷冷箱から取り出し野外で計量するため高い温度下に置かれ著しい鮮度低下を引き起こすこともしばしばあった。このため販売できなかった魚が20%近く行くこともまれではなかった。

また、首都ホニアラでは氷の価格が20キログラム角氷で＄5−00で民間会社で販売されており、高価なためブローカーは氷をふんだんに使用しない。ホニアラ市場で流通している魚はあまり鮮度が良くない。またスーパーマーケット等は殆どが一般冷凍庫で緩慢冷凍された魚を販売しており、なかには油分が黄変しているような魚を見掛けた。このような理由から消費者は冷凍魚に対する不信感があるようであり、魚の流通は主に鮮魚で行っている。

塩干品の消費習慣は一部部族を除いてなく、燻製品も一部では見掛けたものの殆ど流通していない。

現在のソロモンの魚市場の問題点としては、漁民の販売価格に対して、消費者への販売価格が高く、本来日常食であった魚が高級品になりつつあること。魚の価格低下のために流通段階での魚の損失を最小限に止めることが必要と考える。

このため漁民から消費までの過程での品質管理の徹底、氷の低価格供給、離島間の小規模な漁獲物輸送の円滑化が必要であると考える。

（了）

高橋和久 Kazuhisa Takahashi

派遣国：ソロモン諸島
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1990年7月）
出身地：神奈川県
初　出：「水産世界」1989.5.15　（(有)農林水産研究所）

半農半漁で自給自足の生活

ソロモン諸島は、日本の南々東約6,000キロメートルの南太平洋上に2列に並ぶ6主島とその周辺に散在する多数の小島から成り立つ。東約155度～170度南緯5度～12度の間に分布する群島の総陸地面積は、約28,370キロ平方メートル（四国の約16倍）で島の数は78～100といわれる。熱帯に位置し、年平均気温27度、年間降雨量は地域差が大きく2,500ミリから4,000ミリと高温多湿であるが、海洋性気候のため緩和されている。

この典型的な群島国家に、約280,000の人々が生活している。人種構成は、メラネシアン93.4%、ポリネシアン4%、ミクロネシアン1.4%、白人華僑1.2%という比率であり、メラネシアン主体の国家である。

農耕民族として発展してきたメラネシアンは、ひとつの社会が小さな村落で成立したため部族主義が強く、数多くの部族語を生み出した。ソロモン諸島では、現在でも80～100の部族語が日常的に使われている。そして共通語は、英語を母体にスペイン語やポリネシア語が混ざったピジン・イングリッシュ、公用語は英語という複雑な言語体系となっている。

住民の生活は、貨幣経済が浸透しつつあるものの半農半漁・自給自足が原則である。サゴヤシの葉で葺いたリーフハウスを建て、ブッシュを切り開き主食であるタロイモ、キャッサバ、パンの木を移植し、空いた土地でブッシュキャベツ、ナス、トマトなどを育て、その日に採れた魚とともに食卓に乗せる。

また、特別な儀式・行事のために豚、鶏を飼う。衣類・斧・ランプ油などの自給できない品の購入に迫られれば、コプラの共同出荷で得た収入を当てるが、いつもより余計に採った野菜、魚を露地売りするといった生活が一般的である。温暖な気候のため、簡単な住居でも十分であり作物の成育も早い。

また、衣類も多くは必要ない。加えて、公共医療施設は無料という恵まれた環境が、貨幣経済・産業社会への編入を遅らせているといえるだろう。

19世紀後半から英国植民地となっていたソロモン諸島は、1大激戦地となった第2次対戦を経て英国保護領となり、1978年には英連邦の一員として独立、独自に発展の道を歩み始めた。独立後日の浅い当国は、国家の経済基盤の整備を天然資源の開発並びに輸出に依存せざるを得ない。

しかし、コプラ・水産業・木材・パームオイル等の第1次産品が主要輸出品目であるため、国際価格の動向や世界経済の変動に影響を受け易く、経済は安定を欠き経済基盤整備も遅れているのが現状である。

指導員不足で開発計画も暗礁に

独立前より、豊富な水産資源の開発に着手したソロモン政府は、1973年に日本の大洋漁業（株）と合弁会社、Solomon Taiyo Ltd.を設立。当国漁業水域内のカツオ、マグロの漁獲・加工を開始した。更に。1978年にはSolomon Taiyo Ltd と共同出資によりNational Fisher-ies Development Ltd.を 設立、企業ベースの水産業確立を推進した。Solomon Taiyo Ltd の冷凍魚・缶詰・荒節の輸出は順調に伸び、1987年には総輸出額の41%を占める基幹産業となっている。

また、雇用及び政府歳入の増大、缶詰と冷凍魚の国内販売による食料輸入の減少、餌漁買い上げによる地方漁民の収入増といった極めて大きい貢献を果たしている。

一方、国民の90%を占める地方住民は、昔ながらの自給自足生活をしており、国民所得は都市部の半分以下という低水準であった。

1973年、ソロモン政府はこの地域格差の是正及び地方開発の一環として天然資源省内に水産局を設置し、「地方漁業振興計画」に着手した。社会的にも、人口増加に伴う蛋白源不足の解消、地方での就業機会の促進、それによる都市部への人口流入の抑制は急務であった。

当国の伝統的な沿岸漁業は、無動力のくりぬきカヌーにより珊瑚礁水域を漁場とする、天然素材の自作漁具を用いた手釣り、追い込み網、曳縄、潜水等の極めて小規模で範囲の狭いものであり、自家消費あるいは物々交換の為に行われていたという。

今日では合成素材の漁具や船外機の普及が進んでいるが、多種少量の魚類分布に加え、リーフや急深な海底形状のため対象魚種を絞れないことから漁獲も少量であり、旧来の漁業の域を脱してはいなかった。1975年から始まった開発計画ではこの点を踏まえ、漁民に対する漁撈技術の訓練、製水施設と流通

センターの展開、価格保障計画を施策とした。

1984年までには、製氷機30台、大型アイスボックス490個の配置を終え、更に諸外国の援助により13の水産センターが各州に建設され、漁具・氷の供給、魚の販路の提供、漁民の訓練等の中心施設となっている。このような背景のなかで水産関係隊員の要請がなされ、1979年より天然資源省及び州水産局での協力隊の活動が始まった。

1975年の計画開始から10数年を経た現在、開発計画は暗礁に乗り上げている。当初、インフラを整備して物流を興こす考え方で建設された水産センターだが、発電所・上水道・島内交通・島しょ間交通などの周辺環境整備の立ち遅れや技術者・指導者の不足から有効に活用されていないのが実情である。また、漁民も農作業・コプラの共同出荷、教会活動などの制約を受け、専業漁家としての自立を妨げられている。このため、各センターとも収支に見合う魚のムーブメントがなく、その運営は厳しい状況にある。

先輩隊員の努力が根づき芽を出す

このような現状を打開するため、協力隊員をはじめ各国ボランティアには各人の専門分野を越えた広範囲の活動が期待されている。それは、漁村から消費者にいたるまでの全段階に対する活動であり、具体的には漁民の技術向上及び組織化・水産物加工・流通機構の整備・安定市場へのアプローチであるといえよう。

現在、ソロモン水産関係隊員は、適正漁具の選定・インフラ整備及び海外市場価格の良いロブスターとハマダイ・ヒメダイ等の底魚の海外出荷を目標に、試験操業・試験出荷及びソロモン側関係者との研究会を進めている。底魚資源開発としては立縄漁業を取り上げ、2州の水産局で試験操業を実施中である。この試験操業結果は、天然資源省の漁具発注資料とし、漁具の安定供給を図る方針である。昨年から、ロブスターとマングローブ蟹の日本へのサンプル出荷を開始した。これは、Solo-mon Taiyo Ltd.及び大洋漁業（株）の全面的な御協力のおかげであることを明記したい。

前述したような開発の方向付けに関わる活動は大切であるが、それ以上に漁村2地域社会内での活動は重要であり、協力隊活動の基本であるといえよう。社会の急激な変化は、部族社会を揺るがし、人々を戸惑わせている。

今までは、"部落内のことだけ"を考えれば良い生活だった。しかし、いまや1地方漁民といえども、国民の1人としてソロモン国社会とその将来を考えていかなくてはならない段階に来ている。もはや、いくら待っても独立以前のように、病院や定期船・桟橋が無償で整備されることはない。自らの意志と手で、新たな社会を築きあげねばならない。

そして、その新たな社会機構の中で自立し生計を立てていく道は、漁民自らが見い出して行かねばならない。隊員は、その手助けをしていく"良き相談相手""良識ある助言者"としての活動も求められているといえよう。漁民と共に現実を見据え、現状の問題を掘り下げ、正統かつ実現可能な問題解決策を模索してゆく活動の中からこそ、国作りの基礎となるものが産まれると信じる。

当国での協力隊活動は、今年10周年を迎える。先輩隊員の播いた種は地に根ずき、今まさに芽を出そうとしている。この芽を枯らすことなく育てあげることが我々後続隊員の役目であり、この意味ではソロモン協力隊と新たな段階を迎えつつあるのであろう。

しかしながら、水産関係隊員は他分野と比べても志願者は少なく、各国からの要請に対応しきれない現状である。我々の専門分野である水産業は、発展途上国の国作り、特に地方開発の中心産業となるものであり、途上国側からは大きな期待を掛けられている。この時期に答えるべく一層充実した活動の為に、新しい仲間の参加を期待しています。心温かいソロモンの人々とともに心から。

（了）

戸田誠人 Seijin Toda

派遣国：ソロモン諸島
職　種：漁具漁法
隊　次：昭和62年3次隊（活動期間1988年3月～1991年3月）
出身地：埼玉県
初　出：「水産世界」1990.5.5（（有）農林水産研究所）

自給率は40～60%地方はまだ未開発…

現在日本では、戦争体験者も少なくなり、戦争そのものがすでに風化されつつありますが、太平洋戦争の激戦地のひとつとして、今でも語られる地名に、ソロモン諸島ことソロモン諸島国があります。

熱帯の島というイメージがそのまま存在し気候・風土共に、戦争当時とさほど変化はありませんが、しかし現在でもなお同胞の遺骨が数多く眠り、戦車や戦闘機の残骸がそこらじゅうに残っている姿は、人間の愚かさが浮き彫りにされています。

ソロモン人の気質は、非常に穏やかであり、また南太平洋らしい陽気な人間が多く、人ずれしていないというか、とてもシャイな感じを受けます。ほとんどのソロモン人は、子供の頃からくりぬきカヌーに親しみ、ヤシの木に登り、地方に行けば行くほどまだまだ裸足とリーフハウスの生活が営なまれています。

この国での自給自足率は、40%とも60%ともいわれ、自ら取って食べる生活が根づいています。しかしどの途上国でも同じ様に、人口増加率は高く（3.3%）、将来の食糧問題他、今から悩みのタネとなっているようです。

しかし、アフリカなどとは違い、タロイモを主食として、魚や家畜、野菜やくだものは大変豊かであり飢えを知らない途上国のひとつとなっています。

経済的には、日本の影響がかなり大きく、高級商品は日本製で占め、その他は、中国製がその主流となっていますが、船外機・クルマ・ラジカセ・腕時計etcが湧き出ずる国＝JAPANは理解されていても、風俗・文化・伝統歴史・日常生活が存在するNIPPONについては、まったくといっていいほど理解されていないのが現状です。

首都での生活は、日本のそれと大差はありませんが、地方では、自給自足的なランプの生活が営まれ、マラリアも非常に多く、島嶼国家の為に開発が非常に遅れており、日の出前に起き、日没後1～2時間後には寝てしまうのんびりとした生活が続いています。

保冷・保存の設備なく水産物の流通も皆無

私が配属されているのは、ソロモン諸島の西部に位置する、ウエスタン州ギゾ水産局です。ここギゾ水産局は、ウエスタン州の水産行政の中心として、主に地方漁民からの水産物の集荷、買い付け、そして直営のフィッシュマーケットでの販売、漁民への各種技術指導を行っております。ギゾ水産局は、4ヶ所の支局を持ち、それぞれの支局では、製氷及び販売を行っています。

ギゾ水産局自身は、1983年の日本からの無償援助によって建てられ現在使用されております。その他、水産物回収船（YAMAHA漁船5t　1983 JAPAN AID）、冷凍庫、冷蔵庫、製氷機、作業所などを所有しており、行政サービスを行っています。

しかし、ギゾ水産局の活動範囲は、島が点在し、ソロモン諸島で1番広い範囲のウエスタン州をとてもカバーする事が出来ないのが現状であります。現在、広範囲にわたり水産の行政サービスが要求されておりますギゾ水産局の最大のジレンマになっています。

ウエスタン州の特に地方においては、専業の漁業者が非常に存在しにくい状態です。各地域の各村においては、自給自足的な生活がその主流であり、各地方の村では、各家庭で消費される水産物は、各自が確保していますので、水産物を出荷すべき市場が限られ、また流通手段が未発達の状態である為に、水産物は、村内での取り引きや定期的に開かれるローカルマーケットでの動きがその主なものになっています。

この原因としては、ほとんどの村が市場（ギゾ地）から遠く、水産物の鮮度を保つ手段や運搬手段はコストが非常に高くなり、漁業者には負担が大きすぎる事と各地には電気も供給されていない為に保冷保存設備がまったくといっていいほど整備されておらず、自給自足的な生活によって歴史的にも魚の動きが無かった、等々が起因しています。

漁民の意欲向上に効果
技術移転は今後の課題

漁業者の持つ一般的な漁具は、長さ30m以下の簡単な刺網、1本針の産魚釣り漁具（50m以浅）、小イワシ・小アジ用引っ掛け漁具、曳縄漁具があり、漁業用の舟は4mから6m程度のくりぬきカヌーが使用され1人から3人で出漁し、適当な漁獲量に達したら村に帰ってくるようです。出漁時間帯は、夜明け前・夕方・夜間となっていますが、カヌーが貧弱である為にちょっとした海況の変化で出漁を見合わせてしまう事がよくあります。

私は、ここギゾ水産局において水産アドバイザーとして、漁民への漁具 漁法指導、水産物市場の開拓、各種プロジェクトの立案と提言、各種調査地などについて活動しております。

赴任いたしまして1年7ヶ月が過ぎまして、トレーニングコースと称した漁具・漁法指導では、半日コース、4日間コース、2週間の総合コース、地方の村でのコース、ギゾ水産局でのコース、底魚漁業を中心としたコース、漁業全般についてのコース等色々な型式のコースを実施してまいりましたが、新しい漁具・漁法の紹介、漁業推興のアピール、など漁民への意欲の向上、知識の拡大等の面では、効果があるものの技術移転までには今だ到達していないのが現状です。

その原因としましては、やはり前述しました様に、市場・流通面の立ち遅れ、資金面の不備、自給自足型漁業などが、非常に大きな障害になっているのが起因しているようです。 その為に今度は、Model Fishing Village Projectという、地域 期限を選定した上で、ギゾ水産局と協力隊がバックアップし、資金・機・資材を貸与し重点的に魚の集荷を行い、集中的にトレーニングコースを実施していくものです。漁獲した魚が現金に変えられる事により、新しい技術が定着し、また地方の産業の皆無な村においての自立が非常に期待されるプロジェクトという型を用いて実施していくつもりです。

漁具・漁法の改善で
底魚資源の開発に期待

また、ソロモン全域に配属されている他の3名の漁具・漁法隊員と共に、沿岸漁業開発プロジェクトを立案しております。

これは、国内の市場・流通面を無償援助の様な型で導入し、水産物の国内市場への安定供給、海外市場への展開、地方の村の自立を目指しているものです。船舶、各種資、機材を援助により、運営は、我々協力隊が携わり、可能な部門からソロモン人による管理・運営に移行させていくというプランですが、私に与えられた3年間の任期では、とても達成出来ないのが残念な気がします。

ウエスタン州内の漁業者においては、貧弱なカヌー、漁具でも1回の出漁（底魚釣り）で20～40kgの水揚げがあります。

魚種は、リーフフィッシュと呼ばれる50m以浅からの魚がその中心となっておりますが、漁場によっては、150m以浅から、オオクチハマダイやヒメダイなどが、全漁獲量の10～20%を占めておりますので、今後、立縄、底立延縄などを本格的に導入しまして優良魚種の漁獲増を考えております。

また、この地域に多く分布しております、ノコギリガザミについても、素手による漁獲からカゴ漁への転換を実行していくつもりであります。

ここソロモン諸島国における水産市場につきましては、首都ホマニラにおいて、都市部への人口流入問題などにより、供給不足が生じておりますし、オーストラリアのブリスベンを中心とした地域において非常に有力な市場となっておりますので、前述したハマダイ類、ノコギリガザミなどの輸出品目として有望なものとなっております。

今まで述べてきました様に、ソロモン諸島国では、市場 流通面の改善が行なえれば、新しい漁具・漁法技術を十分に取り入れる能力を持っており、底魚資源の開発によって非常に今後期待していけるものと確信しております。

また、その為に私の短い任期だけでは当然不十分であり、後続の隊員に期待しておりますし、私自身の活動だけではそれ自身が点であり、後続の隊員の活動と共に線となり帯となっていく事が、途上国での開発の為には、必要な事だと思います。

（了）

杉山俊士 Shunji Sugiyama

派遣国：ソロモン諸島
職　種：漁具漁法
隊　次：平成2年度1次隊（活動期間1990年7月～1993年7月）
出身地：東京都
初　出：「海技士コース」1993.2.25（海文堂出版（株））

海は広いな～　大きいな～　こんな童謡を口ずさむ時、人々のイメージにあるのはきっと穏やかで、ひねもすのたりのたりかな、とそんな風情の海に違いない。しかし、時として海は、荒々しく牙を剥き、ともすれば足をすくわんと襲いかかる魔の海に変わってしまう。気を荒だたせぬよう、怒りに触れぬよう、どうか凪でありますよう、と恐る恐る船を出す。そんな畏怖の対象でもあるのだ。

サンタクルズ諸島、この南洋に浮かぶ小島は、ひとたび埠頭を出ればそこは、強いうねりの押し寄せる外洋となる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

その日、海は穏やかだった。翌週からの水産講習会を控え、開講地である離島へカヌーで向かうことになっていた。前日まで、こともあろうに自らがマラリアで寝込んでしまい、日程が詰まっていた私は少々焦っていた。

凪の状態でさえいれば船外機付きカヌーで3時間半、問題なく午前中には着くはずだ。日中の暑い日差しを避けるため、朝6時半に海に出た。風も穏やかだ。快晴とはいえないまでもまずまずの天気、ただ、上空の雲足の速さが少し気にはなっていた。それでも、穏やかな湾内、同僚達と軽口をたたきながら、余裕のうちに船を進める。しかし、湾を出て少し経った頃、風が変わり、東から吹いてきた。この時期は、いつも南東風のはずだ。東の空には、低く雲がたれこめている。朝方のあの柔らかい日の光は、みじんも感じられなくなっていたが、カヌーは快調に進む。

ふと、空を見上げると先程よりも雲足が速くなっている。風も次第に強くなり、うねりも少し出て来た。カヌーのへ先が波を叩き始める。

「なんか、天気が悪くなってきたなぁ」しかし、まだ余裕があった。それは、外洋に面したこの辺の島々では、この程度の荒れはそう珍しいことではないからである。カヌーは、相も変わらず快調に進む。一方、風は収まる気配がなく、うねりも強くなってきた。へ先が波を叩いて、全速で走れなくなる。私の脳裏に不安がよぎる。このまま荒れがおさまらないと少し危ないかもしれない。

「戻ったほうがいいかも　…」

私は、皆の顔を窺うように覗き見た。しかし、皆涼しげな顔をしている。不安を感じているくせに変なプライドが邪魔をしているようだ。そうこうするうちに、風はますます強く、うねりはかなり高くなってきた。

「やっぱり危ない、戻ろうか」

準備に費やした苦労、すでに送ってしまった資材、なけなしの予算、講習会の再アレンジ、戻ることで払わねばならない代償が判断を鈍らせる。迷いが決断を遅らせた。

「だめだ、戻ろう」

そう判断するには、時をすでに逸していた。うねりは高い。ここから戻ろうとすれば、このうねりを追い手（カヌーの後ろ側）で受けることになる。カヌーは後ろからの波に弱く、もし受けた場合はひとたまりもない。もう、こうなった以上、逆に引き返すことの方が危険になってしまった。

「ええい、このまま行くしかない」

皆、一様に苦笑した。

行くしかない。こうなればもう迷いは禁物だ。迷いは不安を呼び、不安は弱気を生む。

気が付くとさっきまで出ていた太陽は、いつの間にやら姿を消し、空は一面の黒雲に覆われ、どんよりと暗くなっていた。走るように雲が行き、何やら嫌な感じがしてきた。風は一向に衰えず、うねりとうねりの谷間に入ると波頂は、頭のはるか上に位置していた。頭上から、のしかかるかのようにうねりが追ってくる。カヌーのへ先がひっきりなしに水面を叩く。全身はとうにびしょぬれだ。横波を受けぬよう、うねりにカヌーを向けねばならず、目指す進路にも進めない。とうとううねりの頂きが強風で崩れだした。

「崩れ波だ！」

苦い胃液が喉元に込み上げてくる。

「冗談じゃない！」

状況は最悪だ。しかし、そんな状況とは裏腹に不思議と気持ちは静かに落ち着いてくる。

「くそっ！やられてたまるかぁ」

突然、横から大波。波にカヌーは引きずられ、必至に立直しにかかるが大きく傾く。次から次に大波は容赦なくやってくる。

「間にあわない…」

ザブーン！波をかぶった。浸水したカヌーは、一気にその復元力を失う。皆で必死に水をかきだす。転

覆しなかったのが不思議なくらいだ。
「またきた！」
皆、一斉に叫んだと同時に、カヌーは木の葉のように波間に翻弄される。それでも、必死に水をかきだす。
「くそったれ！」
大波にカヌーの〈先を合わし、波の合間をみて、進路に向ける。経験豊富なドライバーの顔も緊張でゆがんでいる。
どれくらい進んだのだろうか…。島はいっこうに姿を現さない。時計を見ると、すでに3時間半も経っていた。方向が合っていれば、とうに島が見えてもいいはずだ。荷物の上に立ち上がり、前方を食い入るように見つめる。
「何か見えるか」「何も見えない」
皆の胸に不安がよぎる。どの程度流されたのか見当も付かないのである。ミスコースしていれば、いたずらせガソリンを浪費するだけだ。10分、20分、何も見えてこない。
東の空から黒い雨雲が走ってくる。これこそ最悪だ。雨になれば視界は一層悪くなり、島を探すのが絶望的になる。口の中がザラつく。このコースでいいのか？あせる気持ちを押さえようと、皆必死だった。
その時、「あった！島だ！島があったぞ！」地獄に仏とは、まさにこのことだ。うねりの間にかすかに霞む島の姿が、なんともたくましく感じる。しかし、目指す島とは違う島で、ずっと西にある島らしい。やはり、かなり流されていたようだ。なにはともあれ、陸に近づきたいという気持ちでいっぱいになっていた。けれど、雨雲につかまる前に島に近づかなければならない。ただひたすらカヌーを進める。島の姿が視界の中で広がっていく。もう少し…。リーフの中に突っ込むと、さっきのうねりが嘘のように消えてなくなり、平らな海面が広がっていた。
「着いた」「助かった！」
皆、息を付いた。島に着くと、ようやく目指す島も視界に確認することができた。その瞬間、豪雨が襲ってきた。視界は5mもなく、痛くて目も開けられない。やっと着いたと喜んでいたら、次はこれか、と嫌になってしまったが、島にたどりついてからで本当に良かった。これが、沖でと思うとぞっとする。
どたどたと大地を踏みしめる。豪雨の中であったが、なんともいえない安心感がある。「陸だ、陸だ」と思わず子供のようにはしゃいでしまった。

*　　*　　*

やはり、海は怖い。特に、今回は心底恐ろしいと思った。日本での設備万全の船、滅多なことでは沈みやしない。荒れた海への恐れはあっても転覆の恐怖など感じたことはなかった。やはり甘くみていたのかも知れない。この国にきて、海に出れば出るほど海の恐ろしさを実感することになった。

（了）